



第23号

発行 東京清陵会(諏訪清陵高等学校同窓会・東京支部) 会長=藤森宏一 編集 第79回生(昭和48年入学)

事務局 〒113-0033 文京区内本郷1-10-14 加奈利屋館7F 小林公認会計士事務所 気付 TEL&FAX 03-3812-5887 DTP=スタジオパラム 印刷=中央印刷株式会社

# 再び槌を振り上げて

## —われわれは何を求めて生きるのか—いま原点を問う 《清陵魂はいずこへ》

あの震災から一年半が過ぎ、復興への努力は続けられているもののその歩みは遅々として菌がゆいばかりである。あらためて被災された方々には心からお見舞い申し上げるとともにできるだけ早期に本来の生活が復活することを願ってやみません。

さて、あの時以来「生きる」ということの意味を考えなおした日本人は少なくないはずである。人類は地球上に誕生してから幾多の困難に直面し、その度に考え、苦悩し、努力し、乗り越えてきた。そして様々な知恵と経験を積み重ね、他の生物がなしえなかった未曾有の発達を遂げてきた。特に人類の長い歴史からみるとごく最近のほんの短い期間に、科学

技術は想像を超える進歩を遂げた。しかし自然の力はその蓄積を一瞬のうちに無し帰ってしまう。私たち人類は自然の脅威を熟知していたはずではなかったのか、いや、科学技術のもたらす驕奢なる生活の中で、いつの間にか私たちは「昏々と華に眠り」続けてきたのではないだろうか。

わが清陵の現状に目を向ければ、近年学力低下が叫ばれ、優秀者が諏訪地区から他校に「流出」する現象が著しいようだ。時代の移り変わりとともに人や組織の在りようも変化するのは当然のことである。しかし形が変わろうともわが清陵に流れているDNAは変わらないものと信じている。再びわが清陵に輝きが戻り傑出した人物が輩出されんことを願う。いま、「博浪沙で槌をとり、時の圧政に立ち上がった」精神を、憤りを胸に秘め「静かなる行進」を敢行した意気を・・・再び考えてみたい。



スイスアイガー北壁入り口にある記念碑「アルプスを愛した日本の作家 新田次郎ここに眠る Japanese novelist JIRO NITTA (1912-1980) sleeps here」

### 目次

## Contents

#### 第1部 自然と人間

新田次郎のころ  
—生誕100年を迎えて—



オーロラを求めて  
—南極観測隊長 小口高一—

#### 第2部 科学技術と人間 —テクノロジー最前線—

諏訪の頭脳と精密技術が生んだ人工心臓  
世界最強のコンクリート  
79回生技術者対談



#### 第3部 中高一貫 —光と影—

吉田先生現場の苦悩を語る



2012年度

## 東京清陵会 第46回定期総会案内

日時=2012年10月12日(金) 午後5時~8時30分  
総会=午後5時~5時50分 懇親会=午後6時~8時30分  
(午後4時30分より受付開始)

場所=アルカディア市ヶ谷(私学会館) 4F「飛鳥」・3F「富士」  
東京都千代田区九段北4-2-25 ☎03-3261-9921  
市ヶ谷駅(JR、東京メトロ有楽町線、南北線、都営新宿線)  
下車、徒歩2分

青春時代の友に  
会いに行こう

議題① 2011年度会務報告 決算報告 ② 2012年度事業計画 予算案  
③ 賛助金の納入状況 ④ その他

懇親会=会費 8,000円(学生2,000円)

※当番幹事=79回生、次期当番80回生、サブ幹事89回生、99回生

●ご面倒ですが出席、欠席いずれの場合でも同封の返信用はがきにご記入の上、9月28日(金) 必着にてご返送ください。

## 第1部

## 自然と人間

Part.1 新田次郎のこころ  
— 生誕100年を迎えて —

写真展「新田次郎の愛した山々」より  
(2012.6.29-7.18) (FUJIFILM SQUARE)  
(市川一雄さん撮影)

今年6月6日は新田次郎（藤原寛人31回生）が生まれてちょうど100年に当たる。中央気象台に勤務し富士山気象レーダー設置の責任者として大役を果たした（NHK「プロジェクトX」第1回にも登場）新田次郎が、なぜ小説を書き、しかも休む間もなく膨大な量の作品を書き続けたのか、その原動力は何だったのであろうか。

新田次郎を  
突き動かしたもの

よく、妻藤原いさんの『流れる星は生きている』がベストセラーになったことが刺激となったとか、妻に対する対抗意識からなどと言われるが、一番は家計のためという現実的理由だと新田次郎自身が自伝の中で語っている。実際『流れる星…』が出る以前に、理科用教科書の気象の部分を執筆していたし、出版には至らなかったが小説も書いていた。また妻が満州から引き上げたときの記録を書きためた大学ノートを叔父藤原咲平のところに持ち込んだのは新田次郎自身であり、それがきっかけで出版に至ったのである。とはいえ妻の本が売れ有名になり来客も増えてその接待を夫がするといった状況は男として心穏やかではなかったはずだ。したがって「対抗意識」もあながち嘘ではなからう。

## 武士道精神が原点？

しかし新田次郎を物書きの道に走らせただけにはもっと大きな背景があったよう



新田次郎生誕百年記念植樹祭にて。左から咲子さん、正彦さん、正広さん

に思う。武士の系統をひく家に生まれた新田次郎は、小さいころから武士のたしなみとして書に親しんでいた。次男の藤原正彦氏にお父様が行く先々で俳句を詠んでいることを尋ねると、「父は武士の家に生まれたので幼いころから歌を詠む素養を身につけていた。」と語ってくださった。また正彦氏の言うように、卑怯なことを憎み、弱きものには惻隱の情を示す武士道精神ゆえか、職場の東大出のエリートたちに対抗心を燃やし、猛烈に勉強し、著書や論文も書いていたという。したがって物を書くバックボーンは備わっていたと言えよう。さらに正彦氏は生誕100周年記念の講演の中で、満州での経験と戦後の虚脱感から何か書くことで総決算したい気持ちがあり、書くことでストレスを放出しようと一気に書き出したのではないかと語った。

## 書くことは創ること

そしてあれほど売れてからもさらに憑かれたように書き続けたのは、書くことで自分の生き方を示そうとしていたのではないかと思う。「山岳小説家」と呼ばれるのを嫌い、「山を書いているのではなく、あくまで人間を書いているのだ」と主張したこともあった。人間を書くことで新田次郎自身が自分の生き方を示したかったのではないだろうか。

自分の子供にも書くことを勧めている。藤原正彦氏の『若き数学者のアメリカ』も新田が息子のアメリカからの手紙を読んで、本にすることを勧めた。また長女の藤原咲子さんには、「いつかお父さん

が死んだらね、こうやって、こんなふうにして、新田次郎は小説を書いていたってことを、チャキはちゃんと覚えていて、しっかり書くのだよ（『父への恋文』）と幼いころからずっと言い続けてきた。咲子さんに直接尋ねてみると「言葉の遅れたわたしを心配して何とかしようと励ましたんだと思います。」と語ってくださった。「自己表現のうまくできなかった私に、物を細かく観察すること、のちに、それを書くという手段で表現することによって、私の心をさらに開かせようとし、気持ちをも成長させようとしたのだと思う。」（前掲書）当時咲子さんの部屋には「読むことは築くこと、書くことは創ること」とお父様自身の書いた言葉が貼ってあった。新田次郎にとって書くことは生きることそのものだった。

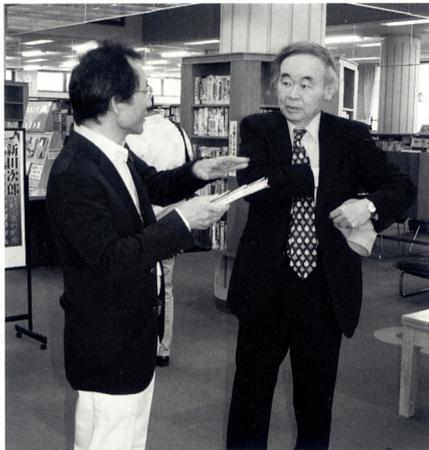
## 郷愁の人

新田次郎が山を愛し自然への造詣も深かったことは周知のところである。これは角間新田に生まれ幼いころから霧ヶ峰を庭のようにして育ったことと大いに関係がある。「心の聖地」とまで表現した霧ヶ峰が観光開発で踏みにじられていくことに「身体が震えるほどの怒りを覚えた」のは当然である。その思いは『霧の子孫たち』としてかたちになった。この『霧の子孫たち』のあとがきと加筆・補筆部分の直筆原稿が40余年ぶりに見つかった。新田次郎の後援団体である「諏訪こぶしの会」会長の市川一雄さん（56回生）が生誕100年の節目に資料を整理して見つけた。（この資料は6月29日から7月18日まで東京ミッドタウンで開催された写真展「新田次郎の愛した山々」で公開された。）市川さんによると、新田次郎は「おれは死んだら諏訪に帰る」が

口癖であり、それほど諏訪への愛情が強かったようだ。清陵のすぐそばにある正願寺の墓石には生前から自分が死んだら刻んでほしいと言っていた句が丸みのある自然石に刻まれている。

#### 《春風や 次郎の夢の まだつづく》

絶筆となった『孤愁〈サウダーデ〉』は、主人公モラエスの故郷と人を思いやる気持ちに、新田次郎自身の諏訪や自分を取りまいた人々への孤愁を重ねつつ書いていたのではないだろうか。『孤愁〈サウダーデ〉』は正彦氏が書き継ぎ、10月には書店に並ぶことになっている。



藤原正彦さんにお話を伺う三井夏海編集委員

### 『霧の子孫たち』は藤原正彦氏の命名!?

新田次郎は小説の題名を決めるのに家族に「懸賞金」を出して募ることがあった。次男の正彦氏はそれが得意でことごとく懸賞金を手にしていったようである。「霧の子孫たち」も正彦氏の命名らしい。ご本人に確かめてみると「そうです。父は題をつけるのが下手だったからね(笑)」と、いかにも正彦氏らしい言葉が返ってきた。実際、諏訪市図書館内の新田次郎コーナーをのぞくと、題名の候補をいくつも挙げて書き直す度に題名を変えた原稿も展示されている。

### 『霧の子孫たち』は4人の友情物語

市川一雄さんは『霧の子孫たち』の中で新聞記者として登場するが、その後も新田次郎とは親交が深く、新田次郎の功績や魅力を伝えていくために「諏訪こぶしの会」を主宰し様々な活動を続けてい

る。その市川さんに当時の経緯を少し尋ねてみた。(インタビュアー：三井夏海)  
夏海：新田次郎さんと最初のきっかけというのは、反対運動の時ですか？

市川さん：いや、そうじゃなくてね。そのときに、ほくが諏訪文化新報っていう個人誌を出してましてね。それに寄稿して頂いた時はまだ知り合っていないです。運動が終息して、『霧の子孫たち』をお書きになるときに、青木さん(青木正博さん/38回生)に取材を申し込まれたんですよ。青木さんは必ず私を連れてったの。青木さんの書くものはみんな私が代筆したの。青木さんて人は秀才なんだけどね、文章が苦手なんだよ。あれが昭和44年。連載が始まった前年の暮れ、11月頃。紅やホテルで行き会った。

夏海：新田次郎さんは、藤森栄一さん(30回生)とはかなり懇意だったとか。

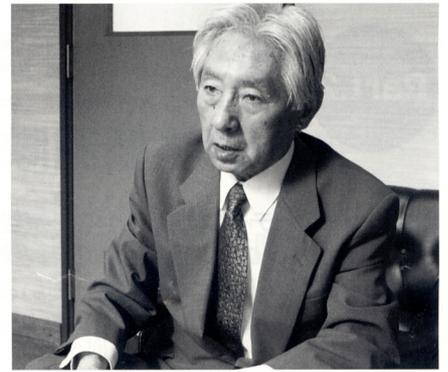
市川さん：藤森栄一さんとはね、懇意なんちゅうもんじゃない。大親友なんです。藤森さんが一級上でね。学友会の中に生徒たちがつくった科学会ってのが昔あったのね。藤森さんはその地歴部長、新田さんは部員だったの。それで、しょっちゅうくっついて、一年下だから、特にお親しかった。

### 詳細はフィクション

夏海：あ、そうですか。牛正(牛山正雄先生/35回生)も運動に関わってきたのですよね。

市川さん：小説の中の牛正先生のこととはね、あれは全くフィクションなんで、牛正先生が表面に立ったことは一度も無い。ただ、青木さんとね、相談に2度行った。夜、意見聞きに。私も教わったからね、牛正には。新田さんは牛正と親しかった。新田さんは植物のことはみんな知ってるよ、だけど、開花時期など詳しい事は牛正から聞いたんです。だからね、あの『霧の子孫たち』ってのはね、あれは藤森栄一さんと牛山正雄先生と新田さんの友情物語なんだよ。で、青木さんも少し後輩だけどやっぱり三澤先生の教え子なんだよ。4人のね、友情物語なんだよ。

夏海：陳情書を東京の代議士のところへもっていったっていうのは、あれは実際に行かれたのですか。



市川一雄さん(56回生)。「霧の子孫たち」について語る

市川さん：あれはね、事実。あの時は珍しく東京に雪があった日でね、あの日は私も行ったの。当時ローカルの新聞の編集長で忙しくてね、なかなか行けなかったけど、あの日だけ行ったんだよ。

夏海：新田さんは頻繁に運動の経過を取材に来られたのですか。

市川さん：新田さんは青木さんにしばしば電話で経過を聞いてきたが、私は質問を受けるとレポートに書いて新田さんに送ったの。それを小説に生かしてくださった。その手紙は全部ここ(諏訪市図書館)にある。

夏海：そうだったんですか。

市川さん：それでね、あの中に「スパイ事件」であるけどね、あれね、あんな騒動は一度も無かったの。あれは、新田先生の推理です。私に押しつけちゃってんだよね。K氏が新田さんに送ったレポートが、実は私のところに新田さんから送られてきてるんだよ。その中に、いろいろ書いてあって、その封筒に、新田さんが「スパイの言い訳」って書いてある。新田さんの走り書きで。・・・あ、咲子さんがお見えになった？

夏海：では、移動しましょう。限られた時間におもしろいお話をありがとうございました。



新田次郎先生誕生百年記念講演にて。藤原正彦・夏海さんご夫妻と大平晋子編集委員

## Part.2 オーロラを求めて —南極観測隊長 小口高一—

「万歳と歓声とテープの嵐の中を、宗谷は東京晴海埠頭を静かに離れた。ワットと耳に入る音が人の声、飛行機の轟音と船の汽笛と入り交じっている。・・・この波路は遠く南極の氷海にまで連なっているのだ。・・・」(田英夫報道隊員が鳩便で送った記事が1956年11月8日全国の夕刊一面を飾る)

どうして南極なんかにかけるのですか?」と聞かれると困ってしまう。いろいろな答え方ができるからである。

南極での研究がどんな意味を持っているのか、どんなことがわかるのか、そしてそれらが我々やもっと遠い将来の人類にどんな役に立つのか、ちょっと考えただけでも5つや6つはすぐにあげられる。

「本当にそれだけが南極にかける理由ですか?」

私の心の中には「南極が好きだから」という答えが同じくらいの比重で頭をもたげてくる。(『オーロラと白い地平線』)

### 経歴

小口高先生：1930年(昭和5年)3月31日岡谷市中央町に生まれる。長野師範附属小学校から昭和17年(48回生)旧制諏訪中学入学。昭和20年に海軍兵学校に入学、9月諏訪中学の4年に戻る。昭和25年旧制第一高等学校から東京大学に入学、大学院に進む。1956年(昭和31年)大学院在学中に第1次南極観測隊に参加。1957年第2次南極観測隊参加、船が氷に阻まれて越冬ならず。1958年第3次南極観測隊参加、翌年南極越冬。1961年田中館愛橘賞受賞。1970年東京大学地球物理学科教授。1970年第12次南極観測隊隊長、翌年南極越冬。1975年以降北極圏(カナダ、アラスカ、ノルウェー



タロ・ジロと一緒に中央が小口高さん。『14人と5匹の越冬隊』より

等)でのオーロラ観測を行う。1989年東京大学から名古屋大学空電研究所に転任、同研究所を改組し太陽地球環境研究所初代所長となる。この改組を後押ししたのは当時の名古屋大学学長飯島宗一先生(41回生)である。1993年定年、東京大学名誉教授。1993年長谷川記念杯(地球電磁気・地球惑星圏学会賞)受賞。以後7年ほど上智大学、成城大学で非常勤講師を務める。2010年12月27日肺ガンにて逝去。享年80。

### 思い出

今年の3月18日に小口高先生の奥様、陽子さんとご長男の亮さんにお話をうかがいました。陽子さんは、控えめに、時おり亮さんに確かめるようにしながら、小口先生の思い出をひと言ひと言かみしめるように話してくださいました。

(インタビューアー：三井夏海)

夏海：東京に出られて、大学院の時に第1次で行かれてますよね。2次3次と行かれて、12次の時に隊長で行かれたわけですが、失礼ですが、ご結婚なさった時期は?

陽子さん：3次の時は婚約中でしたが、越冬隊で行ってしまったので、帰ってきってから結婚いたしました。

夏海：ドラマのようですね。行っている間の、通信手段は?

陽子さん：家族会があり、父に連れて行ってもらい中央郵便局に行き、電報を打ちました。5、6回だったと思います。3次の時は、ちょうど1次隊の映画が上映されていて、それを何度か見に行き、「あそこに居るのかな?」と思っていました。富士の時も電報でしたが、頻度が増えました。NHKで家族の声の録音をして、南極に放送してくれたのですが、雑音などで聞こえなかったようです。



昭和基地でウイスキーの箱を片手にグラスを傾ける小口高さん

夏海：結構気をもんで、向こうのこととか心配されてたんでしょね?

陽子さん：もう、そういうものだと思いますから。

夏海：帰ってきてからいろいろお話は聞かれたと思いますが。

陽子さん：家では、あんまり南極の話はしませんでした。家族の団らんの中で、ぼつり、ぼつりと……。

山が好きの人だったので、3次の時、ブリザードの日に、犬と一緒にペンギンルッカリーに若い方ばかりで行ったと。帰りは犬に任せると、連れて帰ってくれるんだよとか。

夏海：南極に東大のそばにある「呑喜」というおでん屋ののれんを持っていっておでんを作ったそうですね。

陽子さん：大学のそばにあって、学生の頃よく行ったんだと思います。南極でのれんを出した写真がしばらく店内に飾ってありました。

### オーロラ研究は命がけ

陽子さん：第12次隊の時は、オーロラの中にロケットを打ち上げるのが目的で行きました。よく待っていたけれども、3次の時ほどオーロラが出なかったとか。

夏海：オーロラも出るときと出ないときで波があるようですね。

帰られてから後、カナダをはじめ北極圏に行かれてたんですね。留守の時期も長かったと思いますが。

陽子さん：カナダ・アラスカ・ノルウェーなどよく行っていました。お正月には何年も家にいないことが多かったです。

亮さん：いないことがふつうでしたね。

陽子さん：現役の頃は、居間にいても、

ソファーに座って論文を読んだり、思いついたことを何か書き付けたりしていることが多かったです。家族4人そろっていても、頭はオーロラって感じで。(笑)

**亮さん**：観測に行くと、食べてじっとしているの、太って帰ってきました。インスタントラーメンやソーセージなど、何を食べていたやら？

**夏海**：オーロラの研究をしようと進んだきっかけというのはお伺いになった事はあるんですか？

**陽子さん**：最初、地磁気の研究をしたいと思って東大に入ったのですけれども、永田武先生(1次・3次の隊長)が「電離層の方の研究を(地磁気と関係がある)やれ。」とおっしゃって、電離層の研究をしていると、当然オーロラということに。世界電離層研究会が1957年に開催され、2次の時が太陽が一番活潑だということで、2次に越冬するために、1次から行ったということです。

**陽子さん**：オーロラの観測でカナダの山小屋みたいなのところに行くことになりまして、その地域には、銃を持っていくように言われたようです。オオカミやクマが出るんですね。

**夏海**：結構命がけでしたよね。南極もそうでしたけど、カナダでも。

**陽子さん**：でも、「大丈夫だよ！ 平気だ。」と割に平気な人でした。

**亮さん**：カナダで、オオカミ犬に耳を噛まれた話を聞きました。

## 研究ひとすじ

**陽子さん**：胃の全摘手術をして、初めて麻酔が半分覚めて、意識が戻ったとき、窓の外を見て「オーロラだ！」と叫んだんです。長女に、「オーロラが出ているから行って見ろ。亮を待っているのか？ 来たらそのときに見せればいいじゃないか、早く行って見ろ。」と。亡くなる2年前には、東大から電話で、文科省の方から勲章を、と言われましたが、にべも無く一言の元に断っていました。

**夏海**：いかにも諏訪人らしいですね。

**陽子さん**：父がいましたら喜んだらうから、いただいたかもしれません。のちに死後受勲というのもあると声をかけられたんですが、本人が断ったものを、私が

そんなことをして、逝ったときにまた怒られると困るから断りました。

**亮さん**：勲章に敬意を表さないわけではないけれど、自分の研究の価値観はそういうところでは評価されないと考えたのだらうと思います。

**夏海**：自分のやってることにに対しては誇りがあったのでしょうか。

**陽子さん**：学位論文の時、「田中館賞」(東京大学講師昭和37年5月25日極光帯における地磁気極光電離層変動の相互関係)と言うのを頂きました。田中館愛橘先生がその草分けでいらして。

**夏海**：最初の「南極博士」と言われるようになったのは？

**陽子さん**：南極で観測した事をテーマにして、博士号をとった男だからだと言う意味だと思います。5月に帰りまして、翌年の1月までにドクター論文を出さなければならぬということでしたので。

## 家庭ではよき父

**夏海**：家庭人としての小口先生は、どんな方だったのでしょうか。

**陽子さん**：とにかく山歩きがすき。信州に帰省すると、必ず山に行く。祖母や母が「折角帰ってきたのに、すぐに山に行ってしまう。」とこぼすほどでした。(笑)

**亮さん**：子どもの頃は、よく、キャッチボールをしてくれました。こま回しや、たこ揚げなどもよくやりました。正月や日曜日には、昼はたこ揚げ、夜は家族でトランプをしました。夜は遊ぶんだから、宿題は昼間に済ませておけとしかれるくらい。それが楽しみのようなものでした。

**陽子さん**：漫画もプラモデルも大好きで、息子がお小遣いを貯めて買って、少しずつ楽しんで作っていたプラモデルを作り上げてしまい、息子は泣き。慌てて買い直しに行くという事もありました。(笑)「ドラえものの新しいのが出たんじゃないか？ 読みたいだろう、買ってやろうか？」と自分が読みたいからそう言っていました。子供には見透かされておりましたが。(笑)

**夏海**：南極でもゲームをやったり、麻雀をやったりしたようですね。

**亮さん**：子どもが高校生・大学生となると、トランプが麻雀になりました。子ど

もでも情け容赦しないので、子どもは負けじと、どんどん強くなり、負けず嫌いの父は負けるのがいやで、きげんが悪かったりしました。麻雀をしながら、南極の話がぼつぼつ出たりしました。

## 自分の好きなことをやれ

**夏海**：お子様のことに関して、教育方針で、奥様と意見の対立なんかはあったんでしょうか？

**陽子さん**：息子を附属小に入れたいということで、それだけは譲らなかったです。自分が長野師範附属で楽しかったようで。

**亮さん**：いろんな都内の附属を端から一校ずつみて廻って歩いたと聞きました。

**陽子さん**：父親参観日・運動会など学校行事には必ず出席しました。

**亮さん**：子どもにとっては、おおらかで、親しみやすい性格。びりびりしたところはなく、家でも、大きな声を出したことも手を上げたこともありませんでした。家の中は穏やかだった。ただ、温厚というわけではなく……。

**陽子さん**：妹達は「いつもは穏やかだが、滅多にないが、怒ると怖かった。」と言っていました。本当は短気なのかもしれません。車の運転の時、割り込みに腹を立てたり……。(笑)

**亮さん**：子供心はずっと持ち続けている人でした。

**陽子さん**：長男の小学校卒業時、「生い立ちの記」というのを作りまして、「親から」の欄に、「男の子の育てていく過程を見ていると自分の子ども時代をもう一度しているようで非常に楽しかった。」と書いていました。

**亮さん**：自分にとっては、実にありがたい父親だった。



奥様の陽子さんとご長男の亮さん

陽子さん：男の子って中学くらいから、母親には手が届かない様なところがありますでしょう。母親として、「どうしたらいいかしら？」と言うと「大丈夫だよ。放っておけ。」と言っていました。父親なりにこの子を見ていてくれたんだと思います。

亮さん：放任というのではなく、放し飼い（笑）というか。いいさじ加減だった。「仕事は一生のもの、自分の好きなことをやれ！」と、問わず語りのように学んだ気がします。趣味みたいなものがありなく、家にいても仕事のことを考えていました。好きなものを仕事にするべきだと言う考え方。

夏海：本でお読みしましたが、「何で南極に行くのか？」という問いに、「好きだから。」とありました。その辺が生き方の哲学なのかもしれませんね。

亮さん：見たことないもの、新しもの好きでした。コンピュータもプログラムを組んだりしていました。

陽子さん：新しいものが出ると、やってみないと承知しない。おもしろい！という感じで。名古屋退官の時、東大での最後の教え子だった方が名古屋に来たとき、「60過ぎた人に、テフ（数学の組版処理ソフト）を教えたのは初めてだ。」と言っていました。

## 信州のクマ

夏海：未知のものには貪欲だったのでしょうか。研究者の心ですね。御苦労話などはおっしゃらなかったのでしょうか？

亮さん：苦労話は聞いたことがない。

陽子さん：亡くなった後、何人かの方から「隊長はいつも優しく、穏やかだった。」と手紙を頂きました。

夏海：心の広い方だったんですね。

陽子さん：若い頃はどちらかというとは歩引いていたのではないかと思います。

夏海：でも、自分の一番の核となる部分は譲らなかった。

陽子さん：「おれは信州の山奥から出てきた人間よりもずっと上等なクマ様だ！」が口癖で、婚約する前からずっと聞いていました。

夏海：これは名言ですね。諏訪の話とかはよくなさったのでしょうか？

陽子さん：盆暮れには必ず帰省しました。夏休みは必ず4、5日は帰りました。諏訪中には、下駄を履いてガラガラ通ったとか、諏訪湖でボートを漕いだ、端艇をしたこと、戦争中だったので、蓼科大池（現白樺湖）を学徒動員でみんなで掘ったことなどの思い出を話していました。

漬け物についても、梅干しではなく「梅漬け」、野沢菜ではなく「お葉漬け」だと言って、よく送ってもらいました。お味噌も諏訪で炊いた味噌でないとだめでした。

夏海：生粋の諏訪人ですね。

やっぱりお話を聞くと、気骨ある方で、好きなことをなさって、人生全うしたという感じですね。なかなかおもしろい、貴重なお話をありがとうございました。

## 小口級長の「渾名考」

渡辺 誠(48回生)

太平洋戦争が勃発した翌年の昭和17年、諏訪中学48回生として入学、級長の小口高君とは同じ3部という縁を得た。

岡谷の私の生家と、小口君の実家（諏訪中入学のため寄宿していた）とは、歩いて数分の近間にあった。彼は小学校が上諏訪だったので竹馬の友とはいえないが、中学生となって地縁も得たお陰で、期末試験が近づくと彼の家に押しかけ、不得意の理数科目のお復習をして貰った。彼は試験の準備をしている様子は全くなく、時間をかけて親切に教えてくれた。一夜漬けの勉強で汲汲としていた私は、英才との違いを痛感させられた。70年も昔の思い出乍ら、きちんと纏められたノートを見せて貰って驚嘆したことを今でも鮮明に憶えている。

彼は終戦後海兵から諏中に復学の後、一高-東大-東大教授と、文字通りのエリートコースを登りつめた。地球物理学の泰斗として功成り名遂げ、同窓の誇りだった。通常では容易に馨咳に接することもできない存在だったのだが、我々は終始彼を渾名で「ダル」と呼び、中学生の延長気分で気安く交流させて貰った。

ところで、ダルなる渾名の由来は何だったのだろうか。私の記憶では、英語のリーダーに「dull boy」という単語が出てきた時、当時未だ小さかった小口君が口コロコした風体で達磨を思わせたのに懸けダルとしたという事のような。名付け親は先生の渾名もいくつか手掛けたとされる3部の石原功君というのが定説乍ら、早逝してしまっただけで確かめる術はない。dull boyがリーダーに載っていた確証もなく、筆も鈍ったが、ふと鈴木敵君（1部）が同期の会報の「学窓」の北村先生の思い出を書き、リーダーの一節を引用していたことを思い出した。早速照合してみると、所有している2年のリーダーには見当たらない

## 対談を終えて

東京大学の岩上直幹氏によると、小口先生は「観測器を作り、観測地に出かけ、自らの目で確かめ、大量のデータ処理に基づき理解・解釈を進めるという姿勢は終始一貫し、地上多点観測キャンペーンなども、実現性を疑う学会からの批判など物ともせず、杓にとらわれないスタイルで進められ……新しいものを取り込む好奇心と行動力に加えて取りまとめの才により、教育、学会の発展に尽くされ……豪放かつ繊細だった……」（東京大学『理学系研究所・理学部ニュース』42巻6号/2011年3月号）と記されている。いかにも自反而縮雖千萬人吾往矣の精神を貫かれた生き方が伺える。

とのこと。しかし彼は即刻行動を起し、三省堂の本社にBook Iが一部保管されていることを突き止め、わざわざ出向いてdull boyの件があることを確認、コピーを貰って私に届けてくれた。彼の好意で判明した貴重な典拠なので、その件を紹介しましょう。

I know an old proverb. It says, "All work and no play makes Jack a dull boy." What does this mean? It means that if you only work and do nothing else, you will become a dull boy in the end. (THE NEW KING'S CROWN READERS BOOK I (114~115頁) LESSON TWENTY-SEVEN "GAMES AND SPORTS")

確かに dull boy はあった。改めてコピーを読むと、剣道、テニス等の写真もあり、スポーツを勧奨する内容となっている。英語の教科書も国策に添ったものだったのか。古い諺を利用してプロパゲイトしているところなどは、英語の教科書としては苦肉の策だったのだろう。

話を渾名に戻すと、右の文脈から憶測して、ダルは単なる語呂合わせではなく、「勉強一点張りでは dull boy になるぞ」という優等生への揶揄が名付け親の本意だったのではないか。dull boy とは全く無縁だった小口君と、名付け親の名誉のために、取立て紙幅をとらせて頂いた次第。

小口君は晩年胃の手術をして酒は飲めなかったが、「白樺会」（48回生の同級会）にはよく顔を出し、その流れの「はしばみ会」（3部の同級会）にも付き合ってくれた。我々も中学生に戻って燥いだ。老いてもなお我々の級長だった。生き残っている我々も早晚彼岸に移り住むことになる。その時はまた3部の級長になって貰い、旧交を暖めよう。

級友のえにしに感謝しつつ、心からご冥福を祈る。合掌。

## 第2部

# 科学技術と人間 —テクノロジー最前線—

## Part.1 諏訪の頭脳と精密技術が 生んだ人工心臓

2011年4月、山崎俊一氏(80回生)のサンメディカル技術研究所は、日本初の埋め込み型補助人工心臓「エヴァハート」の製造販売にこぎつけ、日経優秀製品最優秀製品賞を受賞した。1991年に研究所が設立されてから20年の月日が流れていた。

### 開発秘話

「エヴァハート」はサンメディカル社長山崎俊一氏の弟であり東京女子医大心臓血管外科主任教授の山崎健二氏(82回生)の思いつきが原点である。1989年の世界人工心臓シンポジウムで、「脚の付け根の動脈からカテーテルを心臓の左心室まで通し、カテーテルの先端に小さなスクリューをつけて血液をくみ出し、心臓の力を助けるヘモポンプ」の発表を聞いて健二氏は衝撃を受けた。当時の人工心臓の常識は拍動型で心臓と同じように脈打つタイプでなければいけないと考えられていたが、健二氏はこの発表をきっかけに「心臓の先端に小型のモーターを取り付け、左心室内にスクリューを入れて血液を送り出す」ことを思いついた。

しかし試作品を作って医療機器メーカーや、ポンプメーカーに開発を打診するが、ことごとく断られてしまう。そこで1991年にサンメディカル技術研究所を設立することになるのだが、ここに至るまでには秘話がある。

山崎俊一氏の祖父、山崎久夫氏はセイコーエプソンの前身である大和工業の創業者で諏訪精密工業の草分けである。父の山崎壮一氏(51回生)は祖父の会社とは関係なく独力で精密機械のミスズ工業を創設し優良企業に育てあげた。息子の健二氏は父に頼み人工心臓の試作品を作ってもらい、大手メーカーに持ち込み

共同開発を打診するが受けてもらえない。壮一氏は当時東京女子医大の主任教授であった小柳仁教授に会いに行き尋ねた。「人工心臓というものはそんなに価値のあるものでしょうか。」「本当に開発できたらノーベル賞ものです。」決意は固まった。

家族会議を開く。「(祖父の代から貯めた)セイコーエプソンの株を売却して人工心臓を開発する。失敗したら遺産はなし。それでもいいか?」3人の息子たちに異存はなかった。91年にサンメディカル技術研究所を設立し長男の俊一氏が社長を務めることとなった。ここで「エヴァハート」の開発設計が行われ、動物実験は二男の健二氏、製作は三男の泰三氏(83回生)が現社長を務めるミスズ工業で行うこととなる。

### 人工心臓の難しさ

末期の重症心不全患者は心臓の左心室が弱っており身体に十分な血液を送れず、そのままだと多臓器不全に陥りほとんど寝たきり状態になる。治療手段としては心臓移植しか残されていないが、日本では移植はなかなか難しいのが現状である。そこで補助人工心臓が左心室の代わりを務めてくれれば患者は通常に近い生活がまた送れるようになる。

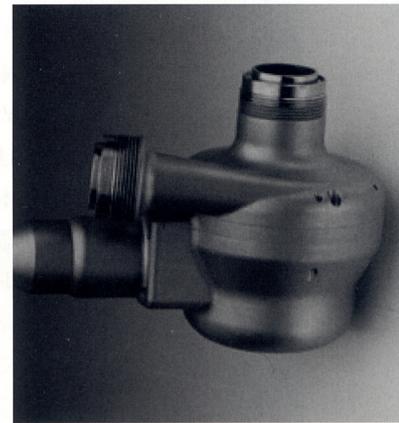
「エヴァハート」は従来の拍動ポンプ型とは異なり、プロペラを一定回転で回す一定回転定常流型で非常に小さく故障

の起きにくい設計になっている。当時、回転型で脈拍がなくなると生きられないのではないかと考えられていたが、実際には脈拍がなくても生きられることが分かった。

とはいえ、健二氏も拍動の重要性は認識していた。拍動がなくなると圧が加わらず血管などが弱くなってしまふからである。ところが「エヴァハート」は小型で大流量を出せるため、右心室の拡張期と収縮期の圧格差に対応して0リットルから一気に20リットルまでの変化が可能になり、一定回転でありながら心臓につけると拍動が出るのである。

最大の難関は血液シール(封印)であった。血液は固まるのでポンプ内に血液が漏れて血栓ができると軸の回転が止まる可能性があるし、またその血栓が脳に達すると脳梗塞になる。したがって血液とポンプ内はシールしなければならないが、どんなに精巧なシールを作っても微量な血液の漏れは止まらない。学会でもこれは不可能といわれていた。

しかし不可能を可能にするのは発想の転換である。「血液の漏れが止まらないなら、漏れても問題が起こらないシステムを作ればいい。」健二氏は地球の水の循環システムをヒントに人工心臓に水を循環させるシステムを思いついた。これによって漏れ出た血液を洗い流し、なおかつ、軸受け部を冷却することもでき摩耗も減るという効果も得られた。



埋め込み式人工心臓  
「エヴァハート」

## 臨床の壁

もうひとつ医療機器開発の難問は治験（臨床試験）である。リスクの高い機器を人体に応用することには極めて消極的な日本の環境で、人体に初めて人工心臓を埋め込む手術を行うことは大変なことであった。それでも当時日本で使える人工心臓が体外型の国立循環器センター型だけという状況下で、ベッドに寝たきりで移植を待つ患者を何人も見てきた健二氏は、日本初の技術を日本で最初に使いたいと思い、日本での治験にこだわった。

治験の前にはシミュレーターを用いた実験や動物を使った生態安全性試験など多くの越えなければならない山があった。しかし東北大でのヤギを使った試験では823日という最長生存記録を打ち立てるなど、思いのほか実験はうまく進んだのである。そして2005年にいよいよ治験が始まるが、いかにそれまでの実験データが良くても、臨床となると話は別である。もし臨床で結果が悪ければこれまでのプロジェクトも水泡に帰すかもしれない。健二氏は手術に際して非常に緊張したという。はたして臨床の第1例は成功し、1年後にその患者は製薬会社に再就職までできた。人工心臓の長期生存記録7年半は簡単に破れそうである。その後日本では異例の速さで2010年12月に厚生労働省の製造承認が下り、2011年2月には公的保険の適用を受けた。いわゆる「保険がきく」かどうかはその治療の普及に影響する。保険償還額は1,810万円である。つまり患者負担は3割の500万円余りとなる。これでも高いように思われるが、実際には高額医療の還付が受けられるので患者は数十万円の負担で済むことになる。日本の心臓病患者にとってはまさに夢のような話である。

「エヴァハート」は黎明期を脱し、いよいよ末期重症心不全患者のための心臓移植に代わる最終手段として確固たる地位を確立することになる。

山崎俊一氏は語る、「これは小惑星探査機はやぶさに似ている。10年、20年とかかっても、成功しなかったら誰も見向きもしてくれない。」

(三井夏海) (参考：清陵勉強会 (2012.4.

24)、「朝日新聞グローブ (2010.3.22)」)

## 山崎俊一氏インタビュー

(インタビュアー：坂本純 三井夏海)

純：僕らが考えているテーマというのが「何を求めて生きるか」ということなんです。いま、世の中を見渡したときに「自分の考えをもって自分で生きる」ということが、一見当たり前のことのように見えて、案外できていないんじゃないかと思うんです。清陵時代には意識もせずに「千萬人と雖も吾往かん」と騒いでいましたが、今考えると、この生き方が今の社会に必要なことじゃないかと思うんですよ。そこで今日は、清陵の校是をそのまま地で歩んでこられた山崎さんに、元気づけていただけるようなお話を伺えればと思っています。

## 外国に行きたかった

夏海：ではまず、このお仕事を始められたきっかけですが。

山崎：ええ。たまたま私、経済学部ですが、若い頃の夢って言うのは、海外に出たかったんですね。清陵の頃は東京に行きたかった。世界を股にかけた仕事ができればいいなと思っていて、商社に入りました。ところが実家が老舗の時計屋で、私長男だったので、継がなければいけなくなったんです。それでも海外への夢が捨てられなくて、思い立って、当時、結婚して小さい子どももいたんですけど、一年間イギリスに留学したんです。ちょうどそのときに医者になってた弟が今のエヴァハートの原型を考案したんですけれども、父が「おまえがやるんだったら会社を創る。」と、それを言いにならざわざロンドンまで来たんですよ。ところが、祖母の訃報が届いて、急遽、父は日本に帰らねばならず、移動するタクシーの中の2時間で、「ぜひ、それはやりたい。」って言ったら、父は「分かった。」と言って戻ったんです。

翌年、会社を設立して、社長になると、これでまた海外に出られるんだと思いました。

夏海：文系から理系への転身ですね。

山崎：アメリカの、FDA (アメリカ食品医薬品局) とか、いろいろ行くんです

が、工学も医学も勉強していくわけです。結局、アメリカの教授や、日本でいう厚生労働省と話をしていく中で、文系理系なんていう垣根を作っているのは日本だけなんです。弁護士でありながら工学博士とか、医者でありながら弁護士とかよくいます。理系だ文系だということで選ぶ基準にするのは間違っているんだなっていうことです。

## 大手メーカーは医療機器に及び腰?

夏海：そうはいつでもいきなり専門外のことを始めるには不安があったんじゃないでしょうか。最初、決断するのに相当勇気がいったんじゃないですか？

山崎：そうですね、最初は、自分でやろうとは思わずに、エプソンとかいろんなところに持ちかけて一緒にやりましょうと。ところがけんもほろろに断られました。

夏海：大手として、生産なんかできるものではない、商売にならないという感じだったんでしょうか。

山崎：当時、日本のメーカーは、人の命に関するものはやっちゃいかんという感じで、特に、体内にインプラントするのは絶対にだめ。それで、門前払いということに。

だから、アメリカなんかでもそういうことをやっているのは、大手ではなくてみんなベンチャーなんですね。

## 日本で認可を採るのは至難の業

夏海：20年もの間、結構ご苦労なさったと思うんですけど、一番大変だったものは何でしょうか？

山崎：一番大変だったのは、僕らのやっている医療機器っていうのは、お上に認可されないと売れないんですよ。他の工業製品と違って、できても売ることができない。当局の認可っていうのは必ずいるわけで、その認可をとるのにどうすればいいかっていうのは、日本は教えてくれないんです。自分で考えろっていうんですね。取り合ってくれなかったんです。最初は。そのうち国もこれだとベンチャーが育たないって分かってきて、相

談制度っていうのができはじめて、教えてくれるようになったんです。治験前相談とか。

その点、アメリカのFDA（食品医薬品局 Food and Drug Administration）はきちんとそういう相談制度があって、システムチックに運営をされている。もう、「アメリカからやるか！」と半ば思っていたんですが、制度が変わったんで、日本からやるということになったんです。

**夏海**：当然できあがったものは、試験をしなければいけないでしょう。しかし容易なテストではないと思うのですが？

**山崎**：非常にもの凄い、いろんな試験をやらなければいけないんです。その中には、動物実験もあれば、人に使う臨床試験というのもある。できるまでに10年、発売するまでに10年。いかにできてから長いかっていうことですね。

## 意味深いエヴァハート

**夏海**：話は変わりますが、エヴァハートの名前の由来は？

**山崎**：命名したのは、ぼくの弟なんですけど、「エヴァ（EVA）」と「ハート」の造語です。エヴァってのは、仏教用語で言うと「利他」、英語で言うと、「共生・融合」っていうような意味があって、哲学的にはエゴの反対語になります。自分の心臓との融合・共生。そして、エヴァには、EVERもかけて、「永遠なる心臓」。まあ、そういう、思いを込めて付けているんです。

**夏海**：実際に使ってどうかっていう報告も来ているわけですよね。

**山崎**：そうですね。1年の成績が非常によくて、生存率は100%。3月までで32例。今月6例入ってますから、成績的には、世界1です。

## 自反而縮雖千萬人吾往矣

**夏海**：ところで清陵生にメッセージは？

**山崎**：Boys, be ambitious. いま若い人は夢がないみたいなので。そして世界との競争が激しいじゃないですか。やはり負けない気持ちが必要じゃないでしょうか。要はちょっとしたことで心が折れない人材づくりが大事じゃないかな。

失敗は成功の元なので、失敗をする前

にいろんな情報を先に手に入れすぎて、結局ほんとの経験が付かないうちに、大きくなっていくと、どっかで躓いて、リカバリーっていうか、敗者復活戦ってのができなくなっちゃってるかもしれないですね。

**純**：世の中には失敗しないと分からない事ってかなりありますよね。

**山崎**：開発型ベンチャーなんて失敗の連続なんですよ。そこから何を学ぶかがキーなんです。トライ&エラーっていうんですよ。全部トライ&サクセス・サクセスなんて行くわけじゃないんで。そんな人生なんてあり得ないんで。

**夏海**：今回、我々、こういうテーマで、先輩方の取材をしてきたんですが、南極にいかれた小口高さんなんか、頭の中では緻密なことを考えているんでしょうけれども、やるときは猪突猛進みたいな感じで。怖いかもしれないし失敗もするかもしれないけれどいっちゃ。これは清陵の中で名を残した人の共通点かなという感じがするんです。山崎さんの話を聞いていると、そういうところは今の若い人に欠けているという気がします。

**山崎**：若いやつなんて「千萬人と雖も吾往かん！」。年をとったら「自らを省みて」というのも重要。それをしなかったら、意固地じじいになっちゃうので（笑）。若いうちはやっぱり、とにかく、ど真ん中直球勝負で。

**純**：ここからの夢は何ですか？

**山崎**：こういう仕事について、世のため人のためって言う仕事をしてる事が凄く幸せだと思うんですよ。医者の方なんか見ても、山崎一族ってのは1人も医者がいなくて、突然変異のように医者になったんだけど、彼の病院に訪ねて行って、前日手術した患者さんのご家族なんかが、廊下で会うと、手を合わせてるんですよ。俺もこんな仕事してえ！っていうのあるんですよ。そういうのに少しでも携わっているっていうのが幸せですね。

**夏海**：エヴァハートに関しては、まだこれから改良の方向が当然おありだと思うんですが、この先、どんな形に、どういう風に改良していかれるのでしょうか？

**山崎**：医療機器と医薬品との違いって



サンメディカル技術研究所  
社長 山崎俊一氏(80回生)

うのは、薬は一旦作ったら絶対変えてはいけないんですね。ところが、医療機器っていうのは、一旦作ったらもう、改良・改良の繰り返しなんです。そういう改良・改良をエンドレスでやることによって、他の会社が追従できなくなってしまう。これが、医療機器の特徴なんです。先駆者利益っていうのが非常に高くて。できてから認可まで10年かかるわけですね。その10年の間に先行メーカーはどんどんいいもの出していくから追いつけないんですね。最初に手を付けるというのが大変で。

**夏海**：じゃあ、これからどんどん進化して、いいものになっていきますよね。

**山崎**：そうなりたいですよ。

**夏海**：いま、実際にエヴァハートを使っているのは海外にもあるんですか？

**山崎**：これから、アメリカで治験が始まります。CEマーク（すべてのEU加盟国の基準を満たす商品に付けられる）の審査も、最終段階です。

**夏海**：似たようなことをやっているライバル企業は？

**山崎**：ありますね。アメリカで2社。日本では今、実質僕らだけなんです。

**夏海**：では、独壇場ですね。

まだお聞きしたいことはたくさんありますが、そろそろ時間ですので、勉強会の会場に移りましょうか。貴重なお話をありがとうございました。

# Part.2 世界最強の コンクリート

近年超高層ビルが次々に建設されている。それは、コンクリートの進化にあり！ その研究の現場に清陵の同窓生がいる。竹中工務店の三井健郎君（79回生）。今年1月12日に71回生の伊藤洋一さんがMCを勤める「地球アステク」というテレビ番組に出演。その番組の一部をご紹介します。



伊藤洋一さんと  
三井健郎君

## 地球アステク

(出演者：伊藤洋一 蒼あんな 蒼れいな)

**三井健郎**：こちらが世界最強の超高強度コンクリート。

**蒼れいな**：なんか、普通のコンクリートと変わらない気がしますけども。

**三井健郎**：見た目は変わらないんですけども、実はこのコンクリートは普通のコンクリートの硬度の10倍以上、300ニュートンの強度があるんです。

**蒼あんな**：300ニュートンで、どういった値なんですか？

**三井健郎**：そうですね、300ニュートン。例えば、こちらに角砂糖があります。これは1cm四方の普通の角砂糖なんですけど、もしこの角砂糖がこちらの300ニュートンのコンクリートでできていたとしたら、この角砂糖の大きさ一つで3トンの重さに耐えることができます。

**蒼れいな**：チョット持ってみてもいいですか？ わあー、重たい！こんなに少しのコンクリートなのに！

**伊藤洋一**：でも、コンクリートって感じしませんよね。

**三井健郎**：密度が非常に緻密で高いので、石のような緻密な肌触りになっている。

**ナレーター**：今回開発された超高強度コンクリートと従来の高強度コンクリートを比べてみると、その差が分かるということで、圧力を掛けて実験してみることに。

## 従来の高強度コンクリートを 圧縮強度試験器にセット

**ナレーター**：まずは、従来の高強度コンクリート。

**ナレーター**：圧力をかけ続け、120 tのところで、

**蒼あんな**：きゃー！ 爆発しましたよ。コンクリートって爆発するんですか？

**三井健郎**：そうですね、ものすごい圧力が掛かっていますので、ちょうどガラスのように非常に緻密な構造になっていますので、少しヒビが入ると瞬間的にボンッと破壊してしまう。

**ナレーター**：次に、超高強度コンクリートに圧力を掛けてみる。先ほどの120tを遥かに超え、240 tの圧力を掛けたところで、

**三井健郎**：こちらは、先ほどのように爆裂することはない。

**伊藤洋一**：形は残っていると言うことでですね。

**三井健郎**：壊れるんですけども、非常にゆっくりと壊れますんで、この状態でも建物が健全ですので、地震が来ても、その間に人間は安全に避難することができます。

**伊藤洋一**：これは、劣化しないんですか？

**三井健郎**：ええ、普通のコンクリートは100年とか200年と言われていますが、このコンクリートは、計算上では1万年以上もつ。

**蒼あんな**：先生、このコンクリートはどうしてこんなに強いのでしょうか？

**三井健郎**：はい、まずですね、普通のコンクリートが何で出来ているかといいますと、まず、砂利・砂・セメント、それと、この水。これを混ぜると普通のコンクリートができあがる訳です。で、この超高強度コンクリートには、そのほかに秘密の材料が一つあります。それがこちらのシリカヒュームという超微粒子です。これがどのくらい細かいかと言いますと、

こちらはこのシリカヒュームを顕微鏡で撮った写真なんですけど、実はですね、この大きな塊がセメントなんです。

で、この周りに着いている小さいボールのようなもの、これがシリカヒュームです。たばこの煙と同じくらいの小さい材料なんです。この超微粒子を入れることによってコンクリートが緻密な構造になっていくとそういうことになります。

**蒼れいな**：日本は地震が多いことに関係しているんですか？

**三井健郎**：そうですね。地震に対して大きな力が加わりますから、それに耐えられるような丈夫なコンクリートを造らないといけない。

**蒼れいな**：安全に関わることだったんですね。ありがとうございました。

## 4人ヘルメットをかぶって 移動

**蒼あんな**：こちらは何を研究されているんですか？

**三井健郎**：こちらは炎を加えて、コンクリートの強さを測る試験器。1200℃まで温度を上げてコンクリートがどのようになるか試験する装置です。

**蒼れいな**：かなり熱いですね。

**蒼あんな**：これ、二つありますけど。

**三井健郎**：向こう側が、従来の高強度コンクリート、手前側が我々の造った超高強度コンクリートになります。

**ナレーター**：クレーンで持ち上げないと運べないほどの分厚いふた。この中には1200℃にもなるので、近寄れない程、回りも熱くなる。厳重に密閉してバーナーで熱を加え30分後蓋を開けてみる。

蒼れいな：ああ、無い！

伊藤洋一：あ～あ、もう、全然違う。だって、向こう側ないもん。

蒼れいな：ってことは、奥の方、あれは爆裂したってことですか？

三井健郎：ええ、もう、火災の炎で爆裂してしまっただけという。

伊藤洋一：すごいですねえ。これ。

蒼あんな：これ、火に強いメカニズム的なものは何かあるんですか？

三井健郎：はい、これは、火にかける前の断面なんですけど、

ナレーター：超高強度コンクリートの中には、鋼鉄の細い針金とポリプロピレンという繊維が入っている。

三井健郎：コンクリートが火を受けますと、コンクリートの中に実は水がまだたくさん入っているんです。それが熱せられますとこれが水蒸気になって、水蒸気になりますと体積が何十倍にもふくれあがりますので、その圧力で従来の高強度コンクリートはその圧力で爆裂してしまう。

ところが、我々が造っている超高強度コンクリートでは、それにポリプロピレン繊維という細かい繊維を入れることによって、それが大体300℃でとけて無くなります。そうすると、繊維のあったところがちょうどトンネルのような小さい空洞のようになって、水蒸気圧を外に逃がしてくれる。

伊藤洋一：外に逃がす。重要ですね。

三井健郎：それと同時に大きな圧力が掛かっていますから、それをこのスチールファイバーによって圧力に対して抵抗してコンクリートを繋ぎ止めていると、そういう二つの効果で、火災に対しても安全な構造というふうになります。

蒼あんな：一見ただけでは分からない、中身ではいろいろなことが起きているんですね。

三井健郎：そうですね、かなり複雑なメカニズムで、火災と地震と。

## ヘルメットを取って移動

伊藤洋一：今度は何を？

ナレーター：攪拌した生コンクリートの状態で超高強度コンクリートにはある特徴が見られる。二人の押さえている容器

には生コンクリートが入っているのだが、右の容器には普通のコンクリート、左の容器には超高強度コンクリートが入っている。(二人が持ち上げようとする。)同時に容器を引き上げると、超高強度コンクリートは広がっていく。

蒼あんな：どんどん広がっていきますね。

ナレーター：しかし、普通のコンクリートは容器の形のまま。

蒼あんな：かなり違いますね、これだけこのゆるさが違うってのは、どのようなメリットがあるんでしょうか？

三井健郎：ええ、例えば建物を造るときに、柱や梁の中には鉄筋がいっぱい入っている、ですから、こういう堅いコンクリートだとなかなか入っていかない。

伊藤洋一：鉄筋に絡み合わないって事でですね。これだとすーっと絡んでいって。

三井健郎：すうっと入って行って、型枠通りの形になるように隅々まで充填されていくというそういう……造っている間は柔らかく、固まりだしたら強くという。

## コンクリートの今後の展望は…

蒼あんな：コンクリートの強度があがってきている事による今後の展望とういかに、可能性について教えて頂けますか？

三井健郎：はい。1970年くらいは、コンクリートではビルの高さは10階くらいまでが限界だったんです。それはコンクリートが弱かったからですね。ところが、それからだいたいコンクリートの技術開発は10年で強度が2倍になるようなそういうスピードで進んでいます。

伊藤洋一：76年にニューヨークに行ったんですけど、そのとき、もの凄く高いビル建ってましたよ。

三井健郎：はい、ニューヨークの高層ビルはすべて鉄骨できています。鉄できています。鉄だとああいうものができたということが一つ。それから、日本と違ってニューヨークは地震が無いので、横方向の地震力を計算しなくていい。

伊藤洋一：なるほどね、地震の関係か。

三井健郎：まっすぐ積み上げていくなので、ああいう超高層が可能になっていくとそういうことです。

伊藤洋一：コンクリートの場合も、御社

のようなああいう新しいものを使って、素材としていいものができるようになったら、輸出できるんじゃないかという気もするんですけど、どうですか？

三井健郎：そうですね、実は、中国とか、シンガポール、それから中東、こういったところで非常に需要が増えているんですね。今日ごらん頂いた「材料技術」も世界最高のものですけれども、それを設計する「構造設計技術」と「施工技术」、こうしたものも、日本の建設技術は世界最高峰。こうした我々の技術をパッケージしたソフトとハードのエンジニアリングとして海外に輸出するということは十分可能性があると思います。

伊藤洋一：ありますよね。

蒼あんな：この技術を持ってすると、だいたい最高何百メートルの建物が建てられるんですか？

三井健郎：今世界最高層のビルは、中東のドバイにできた800メートル。実はあの技術は我々が使っているよりも低いコンクリートでできているんです。

蒼姉妹：そうなんだあ。

三井健郎：我々の技術を持ってすれば、あの800メートルを超えるようなそれこそ1000mを超えるようなビルも可能になってくると思います。

蒼あんな：いつかあれですね、富士山かなんかが目の前にあったりとか……あはは……。

## 伊藤洋一の アステク・コンパス

伊藤洋一：正直申し上げて、今日は本当に驚きました。コンクリートというのは私たちの身近にふんだんにあるものなんですけれども、そこに、半導体の世界で言うような「ムーアの法則」つまり一定期間に技術が進歩して集積度が高まる、そういう進歩がコンクリートの世界にもあるということを知りました。

日本の建設業も世界の建設業も将来大きく変わる可能性があるなあというふうに思いましたし、竹中技術研究所の三井さんが「日本の技術は世界の最先端をいつているのだ。」という事をおっしゃった事はですね、非常に勇気づけられました。

# Part.3 79回生技術者対談

原田健太郎：オリンパスビジネスクリエイツ  
三井 健郎：竹中工務店建設技術研究部  
インタビュアー：三井夏海 坂本 純

丸山 重久：ソニー  
南 尚子：農業生物資源研究所

夏海：最先端の技術に携わっているみなさんに、経歴を交えながら、未来を見据えて技術者の心を伺いたと思います。

健太郎：E=mc<sup>2</sup>という、エネルギーがものにかわるっていう式に感動したのが、理系に進んだきっかけ。キーワードは「ごた」。「ごたっ小僧」。清陵は究極の「ごた」だと思う。「ごた」の中にクリエイティブティがあると思う。幼い頃の遊びの中に、夢やわくわく感、感動がある。

約30年くらい前、TOSHIBAにいた。自分は機械工学で、ビデオディスクプレーヤーの開発をしていた。全くお手本がなく、メカ構造から考えなくてはならなかったんです。で、寝ても起きててもメカのことか頭にあって、新しいアイデアが何も出てこない。非常に枯渇して自分はだめだと思って、全てをあきらめて風呂に入った瞬間に、映像としてアイテムの完成形が浮かんできたの。初めての体験だった。ひらめきが起ったの。苦しんで苦しんで何も出ないという中で。

健郎：パスツールが、「偶然のチャンスは準備した心のみ訪れる。」と言った。いつも心の中で準備していると、チョットしたヒントから大発見をする。たぶんそういう事だと思うんだよね。

健太郎：いま、技術者として、ハードウ

エアエンジニアリング（設計開発）とコンテンツ制作技術っていう、映像とか静止画というコンテンツそのものと、音響技術、それら全体をプロデュースすることに取り組んでいます。「空間演出」っていう世界なんです。空間を映像と音とコンテンツで作っていくんですね。

重久：それ、諏訪湖っ端かなんかで、もの凄い空間演出したら、人を呼び込むっていうか。

夏海：新しい花火大会になる。

健太郎：そうなんだよ。これからは空間演出で新しい市場を作り、実際のビジネスにつなげていくが最終の目的なんですけれども。ぼく自身としては、ハードウェアとソフトウェアを融合することによって新しい付加価値が生まれ、そういう空間に人を呼ぶことで、新たなビジネスにつなげていきたいと考えている。

尚子：ジャングルの湿度とか 香りとか出てきたらおもしろいですね。

健太郎：かおりとか湿度とか、気温とか空気圧とか五感全てを発動させて空間を作っていくと、日本にいながら突然ジャングルの中になったり、海の中にいる感覚になったり、限りなくリアルに近いバーチャル。映像技術が進化しているので、あたかもそこにいるような体験をする事ができる。

重久：それ、一番は、俺なんか70年代の校舎だ……物理部の部室に行って……。

健太郎：できるよ！ バーチャルで作れば。作れたらすごいよな。

重久：校舎の中歩けたらいいなあと思ってさ。20年後くらいにさ、紅やの総会で、戸を開けたら清陵だっていうのが。いいなあ、それやってよ。「三村先生！」って行ってガラって開けたら、

健太郎：タイムスリップしちゃう。

重久：それこそ付加価値のある空間だよ。本当にそういうの狙ってるわけ？

健太郎：それは、ニッチといえばニッチ

だけど、清陵生のOBにとったら、それはもの凄い価値がある。

夏海：ニッチ的な感じのことが、これからは求められるのかな。

健太郎：世の中の方向としては、そっちに来てると思うんだよね。マスメディアのテレビから個別の画面に入ってきている。

純：日経に、「パラダイムの変換」っていうのがあった。今まではとにかく利益中心。さっき、空間を求めるとか、重久が校舎に入りたいていうのは、ある意味、人間の復活なんだと思うんだな。つまり、企業側も良質な仕事をやっていくことに向かっかないとまずいんじゃないかと。そこにもものづくりの可能性というのがあるんじゃないかと思う。五感だよ。結局技術を求めると、シンプルな世界、人間そのものに近づいてくる。

健郎：バーチャルの方へ行くと、元々のコンテンツの方が価値が増してくるというよな。

夏海：丸山はそこら辺どうなの。

重久：俺が元々入社したのは家庭用のビデオを開発したかったから。今まで見ればなしだったテレビが、あとから何回でも見られるわけ。俺、それを開発したくてソニー入ったんだよね。昔って垂直統合で重要な部品はほとんど社内で作ってたから、いろんな部署があった。俺、電気屋だけじゃメカ図面も相当画いたよ。部品になって結構あっちゃこっちゃ行ったよ。俺なんか入社したときは、何ヶ月も研修やって、全然かけなかった図面かけるようにしてくれたから。昔ってやっぱ凄かったんだな。

健太郎：そうだね、社内で研修とか、ちゃんと育てるっていう意識あったね。

重久：いま入社してきた奴ら即戦力。研修も少なくなっちゃってて。

健郎：技術開発のサイクルが相当短くなっちゃってる。

重久：で、その後開花するのがね、オートフォーカスとか、手ぶれ補正の技術開発。入社して2年目、給料が12、3万だったときに、50万の撮影セットを一式買ったの。その時に買ったベータのポータブルデッキ、今でも実家にあって、たまあに、もう何十年も前に亡くなったばあちゃ



原田健太郎君 (79回)  
オリンパスビジネスクリエイツ

んとか見ちゃあ、やっぱりいいなあと思って。ああいう27、8年前のデッキが動くって言うのは、で、そのくらいビデオが好きで。やっぱり、ズームとオートフォーカスを速くしようということで、それがプロジェクトになって、最終的にはCCDTRIというんだけど、

**健郎**：買った！俺、ちょうどアメリカにいて、親父が来るっていうんで、でっかいビデオ大変だけど持ってきてくれて言ったら、今はそんな時代じゃないって、最新のソニーのこんなちっちゃいやつ。

**重久**：マッハズーム・マッハフォーカス！フォーカスの部分なんてさ、まさに、俺と何人かで開発した。あれ、ソニーではじめて自分の工場で作ったビデオカメラのレンズ。結構徹夜が何日も続くくらいがんばって。手ぶれ補正はそのあと。手ぶれ補正ってチノンの技術が関係したパナソニックが最初じゃないかな。うちはね、バリアングルプリズムって言って、板ガラス2枚の間に、ある屈折率のオイルを入れて、それが最初だった。その後、得意のリニアモーターで補正用のレンズを動かす方式なんかを開発した。

96年に衝撃的なものを見てしまった。指紋照合の開発。これからは本人認証や！って思って。そのときの本部長で、俺は師と仰ぐ素晴らしい人から、「丸山君もたくさんパスワード使ってるでしょう？ 覚えきれないよねえ。これ一発だよこれ！ これからはこれだよ！」って言われて。完全に本道のビデオから道を



丸山重久君 (79回)  
ソニー

踏み外して、PUPPYって名付けた指紋認証に。俺は3号機まで全部リーダーでやった。そうこうしてたら、あるとき、Suicaが東京で始めて、開発者が初代の事業部長。「Suica使ってくれ」って言われて。使ったら「なんてすごいだろう！」と思って。その次の技術があるからってということで、ソニーでは、技術方式はFeliCaっていう。それに移ったのが2003年。そこから、おもしろくてはまって、FeliCaの技術開発をやってます。

**健郎**：あれは、結構外国人が来てびっくりするらしいね。

**純**：証券の世界は、売ってこいの世界じゃない。昔、10万とか50万が土下座しても売れなかった時代があるんだよ。それでも一生懸命やっていると、世の中って不思議なもので、どっかで救われることがあるわけ。今、会社の若い連中に言うわけ。涙流して売れないものを売っているのをどっかで見てくれる人がいるからって。絶対あきらめたらいけない。

**健郎**：それは、あるよね。

**重久**：それは、難しいところなんだけどね。途中ほんとに、見向きもされなくなる時もあったしね、ほんとにこれやっててどうのかなって思うときもあるけど。例えば指紋照合なんかは、最初に、本部長が言ってくれた一言で「パスワード覚え切れねえだろう。これからネットワークの時代になるから、絶対要るんだ。」っていう、その拠り所なんだと思いますね。で、FeliCaなんかも、やってて一番嬉しいというか、電車遅延で改札止めになったとき、「今から改札開きまーす。」って言って、バツて開くときの、ピッ、ピッ、ピッ……ってみんな凄い勢いで通過するんだけど。あの時俺いつも思うんだけど、まさか、カードとか、リーダーライターここで壊れたら大変なことだな、暴動が起ころなって思うんだ。でも、みんなスーって通過して行くから（うれしい）。

**夏海**：展開しようか。健郎。

**健郎**：ぼくは、土木・建築の、建築なんだけど。大学の建築学科入ってくる連中ってのは、みんなデザイナーをめざしている。最初概論が始まったころ、周りは芸術家肌の連中が半分くらいいて、こういう連中と一緒にやってく自信がなく、



三井健郎君 (79回)  
竹中工務店

チョット違うんじゃないかと。

デザイン関係が不安になってきて結構悩んでいたころ、丹下健三のオリンピックプールを見に行ったの。中に入ったら、鉄骨のケーブル構造。よく調べたら、丹下健三がデザインをやったけど、ケーブルの構造は坪井善勝っていう構造の先生がやった。坪井善勝はあれは自分の作品だって言ってるの。丹下健三はそれに屋根付けてただけだって。それで、構造設計をやりたいなって。

大学の建築学科でやるのは、鉄骨と鉄筋コンクリート。鉄骨造は、完成された技術のような感じだったけれど、コンクリートの方はまだ強度も低いし、コンクリートだと10階位しか可能でない時代だったんで。これは新しいコンクリート技術を開発したい！と。完成されていない技術ってところが非常に魅力的で。

日本の景気が上向いていって、みんな都心に住みたいっていうニーズが出てきた。20階もあんまりポピュラーじゃなかった時代、住宅公団が30階くらいの超高層のアパートを建てたいと。それは、コンクリート強度を倍くらいにしないとできないってということで、その開発を始めた。そのとき思ったのは、コンクリート強度を倍にしたら、40階、50階、と絶対ニーズが増えるだろう。これは、どんどん飯の種になると思って。(笑) 超高層のプロジェクトはゼネコンのメインのプロジェクト。そういう意味で技術開発を希望して、当時(1983、4年)、ふつう

の建物が、強度でいうと、1cmあたり20~24ニュートン。30階にするには、それを倍に。それでも無理してたので、柱と柱の間が4m位。柱も太く、あまりにも住みづらい。あの頃の超高層は、みんな鉄骨造。鉄骨造の弱点は、超高層になると揺れる。柔らかいし、柱も細いし、オフィスだと大丈夫だが、24時間住む集合住宅には向いてない。隣の音も聞こえちゃまずい。っていうんでコンクリート造がいい。

日本は地震がある。地震は上からの力と横からの力。水平力を考慮するとたんに難しくなる。チームを組んで開発して、30階建てを造った。それが、42ニュートンという最高の記録を出して、それから60ニュートン、品川プリンスホテルでやって、80ニュートンと更に強度を上げて高いビルを造っていった。

さっき出た物作りの話。大学の頃からファンだったアメリカの大建築家フランク・ロイド・ライト。その人が大正時代に帝国ホテルを設計に来たときに、ライトが図面を持ってくると、職人さんがライトに意見を言う。この石の積み方はこうした方がいい。壁の塗り方はこの方がいいとか、ライトがびっくりして、アメリカの職人はただ渡された図面の通りにいかに速くやるかだが、日本の職人は方法まで意見を言う。非常に感心した。当時の日本ではそういう雰囲気があった。職人の気質。今、結構世の中厳しくなっているから建設業もそういうと



南尚子さん(79回)  
農業生物資源研究所

ころはほとんど無くなって、外国人労働者も増えているし、建設業の職人さんの給料ってびっくりするくらい低いし、モチベーション、その辺も改善していかないと、今、チョット壊滅的な状況なんだ。

**夏海**：尚子さんは。

**尚子**：つくばの農林水産省の農業生物資源研究所っていうところで仕事をしています。稲の病気にに関する研究をしています。稲にかかる稲熱(いもち)病というカビなんですけど、めざすゴールは、病気にかかりにくい稲を作る。それには、病気の研究もしないといけないし、稲の方の研究もしないといけない。双方のことを調べているわけですが、そのときに、遺伝子組換えの技術とか、DNAを組換えるとか、そういう技法を使ってるわけです。私が大学と大学院にいたころ、ちょうど、DNAとか遺伝子組換えとかそういうことがブームになる時だったので、手法をいろいろ勉強して、それが未だに使えているので、もちろん日々進んでいる部分もあるんですけども、それを使って今は稲の研究に携わっています。

最近思うのは、基礎の研究ってすぐ明日商品になったり、明日からこの薬が有効ですというふうに結びつかないんですよ。さっきのコンクリートの話のように、10年先とか20年先を思うと、基礎の研究がちゃんとできてないとやっぱり次に続かない部分があるので。

**重久**：生物の研究ってのは、稲とかに何かを施して半年くらい様子を見るってことなんですか？

**尚子**：そうですね、病原菌が稲に付着したときに、両方にどんな変化が起こっているか見るっていう。

**健太郎**：メカニズムをまずは解明するところから始まるわけ。

**尚子**：突然変異種を無理に作るんです。マウスなんかでもよく、免疫系の欠損したマウスとかありますよね。稲の遺伝子の、ある一部分だけを壊してしまうという手法があるんです。ここを壊すと、例えば稲全体で伸びないとか、根が伸びないとか不健康なことが出てくるわけですよ。そうすると、その遺伝子が何か関係してるんだろうということに。ある程度

はここをやったらたぶんこうなるって予想して。

**健太郎**：それを実証するわけだ。病気にかかりにくい稲を研究して、結果的には稲の生産量を増やすって目的？

**尚子**：ゴールは、病気に強い稲。

**健太郎**：新種を作る？

**尚子**：たぶん、病気を無くすことはできないと思うんですよね。農業を使わずに、稲を強くしたい。遺伝子の中である部分だけをいじって、アタックしにくくなるように。ただ、稲熱病は稲にはかかるけど、他の植物にはかからない。それは、ある意味研究材料なんです。どうして稲だけにかかるかっていう。

最近だと、東北で海水をかぶった田んぼで稲を育てるのができないっていうじゃないですか。こういう事態が急に起こるとは思わないので。そういう応用もあるんですよね。そうすると、ある程度水田が塩水かぶった後でも、できちゃうっていう。そういうことができれば一番貢献度は大きいと思うんですけども。

**健太郎**：そういう基礎研究ってかなり時間がかかるでしょう？ 評価するのはどうやってやるんですか？

**尚子**：IPS細胞なんてマスコミで有名になってるけれど経緯をマスコミで取り上げられてるんで、あんなに華々しく(評価されましたが)。どういうところをめざすかっていうのは、もちろん先見の明があると思うんですけど。ただ、それが、稲と病気とかいったらすぐにお金になったり、何かに応用できるかっていうとまだ時間のスケールがちょっと変わってくるので……。やっぱり瑞穂の国っていうじゃないですか。だから、日本の稲を守っていかなくちゃならないっていうか。根底にはそういう気持ちがあるんです。

\*身近にある当たり前で便利・安全な生活。それらを支える最先端の技術に、ここに居るみなさんが関わっていらっしゃる。輝かしい実績の陰には大変なご苦労も伺えます。未来の日本の技術を担うみなさん。自信と誇りを持って邁進していかれることを期待しています。

(担当/大平晋子)

## 第3部

化学の授業が終わると吉田先生の教卓に生徒が群がる

# 中高一貫 —光と影—

## 吉田先生現場の苦悩を語る

清陵の中高一貫教育が平成26年度より始まる。期待が高まる一方でその「効果」に疑問を投げかける声もある。この新しい清陵のかたちをどう見るべきだろうか。こういう大きな改革には必ず光と影が伴う。いま清陵で中高一貫を担当している吉田和正先生（79回生）にその現状と展望を語ってもらった。



2012年5月25日 清陵高校化学研究室  
聞き手：坂本純、三井夏海、大平晋子

### 中高一貫は三種類

夏海：清陵の中高一貫はどういう形になるの？

吉田：中高一貫って三種類あるの。併設型・連携型・中等教育型。都立の場合は三種類つくる。長野県の場合は併設型に決められている。中学の定員は2クラス80名、外進生の方が多いという、これが併設型。小石川のような、中等教育型で6年間をズーっと同じ集団でやるのとは根本的に違う。

清陵が中高一貫を構想して、7年くらい前、一回挫折して、再びまた出てきて、3年くらい経った。その間、視察に出た学校の数は50校くらい。3回行ってる学校もある。結局参考にしてるのは併設型。

### 悲しき現実

吉田：ミックスすることについてはいろんな意見がある。でも、「清陵生は2種類ではない」そこが基本。けれども、一方で一貫にしても結果が出ないのでは意味がない。今、地域の生徒が清陵にあがれて集まってくるっていう現実はない。実際には2番手の子かもしくは3番手の子。各中学のトップは他に流れる。甲陵、深志ね。甲陵には30数名、深志には20数名、だから、高校受験で約60名が（2クラス分くらいだね。）が流出する。甲陵に中学があり、松本に私立の中学があ

り、秀峰（秀峰中等教育学校）小学校だって才教（才教学園小学校・中学校）があり、結局その学年で流出するのは三桁。3クラス分、ほぼ上の層が外に出てくってこれが現状なんだ。だから、高校入試の成績はどんどん下がってる。ここ、減少傾向が顕著になったってことが、中高一貫を校内的に決めていく最後の手ってことになった。

### ミックスの難しさ

夏海：1年生から6年生までを長期にわたってじっくり教育をして力を付けていくってことじゃなくて、結局中高一貫とは言え、中学は中学、高校は高校みたいな雰囲気になってしまいかねないよね。それに高校の教員が中学も教えると、中学の教員との間に齟齬が出る可能性はあるよね。

吉田：特に最初のうち、小学生が中学生になったとき、いまでも、中一ギャップっていう言葉があるように、そこは中学の先生にうんと活躍して欲しいと思って、要するに段々高校の教員が授業に入る、そういうシステムを考えているのね。特に、習熟度ないしは少人数で授業をやる場面で、中学の先生と高校の先生が同時に授業に入って、途中で交換するとかね、様々な工夫をしながら。少人数で相互に乗り入れをする。これが基本。それで、会議とかはね中高6年一貫。これも分断しないような仕組み。でも無理をしても続かないので、継続しながら分断しない

ような。そこはね、先生方、みんな難しいって言ってる。

夏海：高校の学年時から、外進生と内進生とはどうなるの？

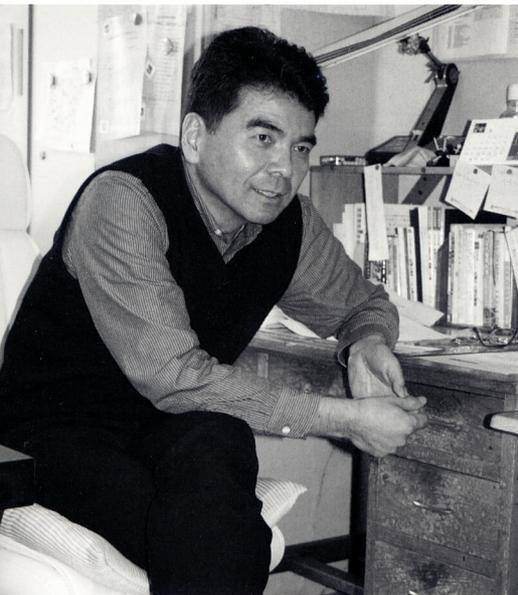
吉田：清陵は幸いなことに、クラスと授業は別。だから、クラスについては完全ミックス。同じ割合で、成績ももちろん考慮しながらだけど。講座については、習熟度を組む。結局は成績に応じて習熟度を組むので、恐らく内進生は、上位に入ってくる外進生の一部と一緒に授業を受ける。そういう形になるんだらうと想定されてるけど、1年の前期については、内進生はそのまま、上位講座、アドバンスコース。2学期制だから、9月の試験の時に講座の組み替え。それを、1年、2年と続ける。ところが切磋琢磨するとか、上位層は上位層として伸ばしていくという伝統が高校にはないんで、それを、校内合意するのがなかなか大変。混ぜるけど、千葉中高のようなほぼ同じ割合で完全ミックスするのは、清陵では外進生の実力がなくて不可能。

高校でミックスして成功しているのは、例えば岡山操山。高校を単位制に変えてミックスした。広島中高は、習熟度を高校で組むという形でミックスした。

進学型単位制高校ってね、これはね、希望する受験科目をきちんととれる体制を組むということ。自分の希望受験に応じて、かなり違うカリキュラムを個人個人が組めるっていうこと。

純：学校がばらばらになっちゃうんじゃない

清陵高等学校 中高一貫担当 吉田和正教諭



ない？

吉田：それは本当にいやなんで混ぜる。但し、混ぜ方を工夫する。それが構想の一番基本。他の学校でいいとされていることは基本的に全部検討して続く形で入れていきたい。

夏海：そうかあ、悩み多いな。端で見るより難しいよね。

## 中途半端なアピール

晋子：今、説明会をやってらっしゃるじゃないですか。凄く期待してらっしゃる保護者の方は多いようですが。その中で、本当にどんな子を育てたい？って教育方針がいまいち伝わってなくてちょっと物足りなかったっていう感想があったんですけれど。

吉田：例えば、保護者が明瞭に言って欲しいこととして、東大合格者何人を出すんですか？合格率を何パーセントにするんですか？その辺の数値目標を長野県の公立高校はもてない。公表することなんてできない。それで、物足りないっていうの。

長野県が中高一貫教育を公立に入れるときに、大学入試の実績だけ上げますよって言って、入れてるわけじゃないんだよね。もちろん、清陵だって合格実績は気になるけど、受験勉強だけ中学からやるなんて全然思っていないので、そういう受験勉強だけをさせるような学校ではないということはアピールしたいわけ。一方で、実績も出したい。その両方について

言ってるつもりなんだけれども、例えば数値目標がでてこないから、分かりづらい、どこまでやるつもりなのか分からないって言われちゃう。かなり「こういう生徒を育てたい」って書いてるつもりではあるけどね。

夏海：これ（パンフレット）だね、保護者はどこにでも書いてあるようなことってイメージしか受けない。やっぱり、どれだけ点数伸びるんだみたいなこと聞きたいんだよね。

吉田：「大学入試はどうなんだ」ってところから、「どういう人間教育をしてくれるんだ」という層まで、結局どっちについても物足りないって言われちゃう。

夏海：清陵みたいな学校ってのはね、昔からやってる蛮カラで、クラブ活動もし、馬鹿もやり、ということはやらせておいて、授業の方はそれこそ、極端に言うところ予備校っぽい授業をどんとやっても大丈夫じゃないかなっていう気がするんだけどね。

吉田：予備校型の授業は、一回学校で習ってるから成り立つ授業で、初学者に対してはなかなか難しいところがある。

夏海：私立は予備校から先生呼んでるんだけどね、通常授業とは別にね。

吉田：私立のようにしたいかっていうとそういうわけでもない。

## 変わらなければ

吉田：最近の生徒は保守的でさ、学校変えたくねえっていうか、中高一貫を入ると、今までの清陵が変わってしまうから、いやだって言うんだ。しかし彼らにとっては、入ってきた奴らが清陵生で、そいつらと教員で清陵を作るんだよ。この地域で頑張ろうって、ここに来たいって入ってきて、実際にここででっかくなって出て行くってね、そうであるためには今の清陵から変わらなきゃいけないし、それを維持するためには常に変わり続けなきゃいけない。

まわりがどんどん変わってきて、例えば通学服がかわいい、他に中高一貫教育の学校ができたりして、状況が変わっていくのに、清陵は変わらないできていた。だから、土俵が中高一貫でいいか分からないけど、とにかく変わらなければ。ここ

で学びたいという志のある優秀な生徒達が来て、実際に学んで力を付けて外に行く、それにはどういうことができるか、っていうことを一生懸命構想している。

純：いいじゃん。熱い先生がいるんだからさ。吉田がこんなに熱いやつだと思わなかった。（担当／大平晋子）

## 追記

私たちはこのインタビューと同時に、今の清陵生の1日を取材させていただいた。現在の清陵生は私たちの頃に比べると「小ぎれい」になった。廊下で出会う生徒たちもみな礼儀正しい。一方で授業ごとに廊下をぞろぞろと移動する様子は変わらないし、数学の授業で前後の黒板一杯に生徒が解答を書く演習風景も昔のままだ。昇降口の廊下には檄文が掲げられていたのも懐かしかった。清陵のDNAを残しながら、どんな新しい清陵の姿が見えてくるのだろうか。

この取材中に高木昭彦先生（64回生）の訃報を知りました。清陵の一時代の終焉を象徴する出来事に思えました。昭和50年度から17年間母校に奉職され、退職後も非常勤として、今年の1月29日に亡くなるまで教壇に立たれていました。高木先生は三澤勝衛先生や牛山正雄先生らと並べて語り継がれるべき清陵の伝統を継ぐ学者であったと思います。世界史の授業で教科書には記されない「雑談」の大切さと面白さを教えていただき、よく本を薦めてくださいました。ツヴァイク『人類の星の時間』、ロマン・ロラン『ジャン・クリストフ』・・・10年前われわれの「かかなき会」にお出でくださったとき、「古き良き活力ある清陵の雰囲気を感じたくてここに来ました。」と述べられたのが印象に残っています。ご冥福をお祈りします。（三井夏海）

## 御礼

今回、ご多忙にもかかわらず取材に快く応じてくださった皆様にあらためて御礼申し上げます。また諏訪市図書館、長野日報、南極OB会事務所、富士フィルムスクウェア、その他の多くの皆様にもご協力をいただきました。どうもありがとうございました

## 2011年度 東京清陵会定期総会報告

第45回東京清陵会定期総会・懇親会は、2011年10月14日(金)例年通りアルカディア市ヶ谷で開催された。今年の当番幹事は78回生が担当した。

参加者は来賓2名を含めて172名、うち現役学生は15名であった。ここ数年200名割れが続いている。

定期総会は、午後5時より「飛鳥の間」で開始し、会務報告、会計報告、監査報告、事業計画、予算案等の議事をつつがなく終了した。

懇親会は、午後6時より「富士の間」で芳澤範朗(78回)、斎藤真澄(78回)お二方の司会により始まり、伊藤高光さん(78回)の開会の辞に続き、藤森宏一会長(63回)の東日本大震災の被災者へのお見舞いと早期復興を祈願するとともに、こういう時だからこそ、同窓の絆を深めようとの挨拶、ご来賓の松下勲同窓会長(59回)と佐藤尚登・清陵高校校長はともに挨拶のなかで、平成26年4月開校予定の中高一貫校について話され会場の関心を引き付けた。

鏡開きは、最年長の45回生北澤不二彦さんと最年少の110回生山岡紳介さんを含む5人により行われ、小川勝嗣前会長(59回)の乾杯で和やかな懇親の会は始まった。

学年別着席のテーブルの間を多くの方が行きかひながら、久方ぶりの挨拶など談笑の輪は幾つも広がった。

最後は、恒例の日本一長い校歌を演壇上の当番幹事78回生と会場が一体となり、高校の青春時代を偲び声高らかに歌いあげた。佐藤敏夫さん(79回)の発声で、万歳三唱し、午後8時45分閉会した。大いに盛り上がった懇親会であった。

## 2012年度 同窓会本部定期総会報告

6月30日、ホテル紅やにて定期総会が行われた。昨年度の決算および2012年度事業計画・予算が可決され、役員改選では松下勲会長と副会長5名が再選された。クラブ活動同窓会後援会会計については、5年間で1人1万円の援助を募っ

ている。現在1240名の協力者を得ている。が、収入は減ってきており、今後、一層の支援を要請。

母校創立120周年記念事業に関して、担当常任幹事として矢崎和広氏(68回生)が任命された。実行委員は会長以下21名。担当82回生。記念名簿の体裁は110周年と同様にし、2500万円の特別会計を組む。正確なデータの収集協力の呼びかけあり。

母校中高一貫校にむけ、よりよい環境で学べるよう物心両面での支援を約束。併設中学校を育てていきたいという意志を共有。

会の最後に、12年間の長きにわたり、事務局長として同窓会にご尽力下さった武井浩明氏(56回生)の退任にあたり、会から感謝状と記念品が贈られた。後任には林隆憲氏(68回生)が就任。

\*講演会/前岡山操山中・高等学校 校長 國友道一先生をお招きし、「中高一貫教育—岡山操山と諏訪清陵—」と題し、ご講演を頂く。

\*対談/現清陵高校教頭 佐倉俊先生を交え、吉田正和教諭のコーディネートのもと対談が行われた。中学では視野を広げ、体験を積み、学ぶエンジンを大きく育てる。高校では、切磋琢磨しながら、高い学力と生きて働く力を養う。併設型中高一貫校として成功することをめざし、物心両面での支援を約束したい。

## 東京清陵会の現況

データベースから東京清陵会の現勢を見ると次のとおりである(2012年7月31日現在)。

### 1. 東京清陵会会員の定義

(1) 首都圏(東京、神奈川、千葉、埼玉、茨城、群馬、栃木)在住の同窓生(ただし、退会申出者を除く)。

(2) 転居して首都圏を離れたが支部会費を納入している同窓生。

2. 会員現勢 総数3,422名(住所不明者1,089名を除く)

#### (1) 都県別会員数

東京都1,622名、神奈川県710名、千葉県430名、埼玉県425名、茨城県72名、群馬県26名、栃木県26名、その他111名

#### (2) 年次別会員数(別表1)

3. 会費納入状況(2011年4月~2014年3

月会計期:2012年3月末現在)

(1) 納入者数 407名

(2) 年次別会費納入者数(別表1)

(3) 年度別納入額および人数(別表2)

## 会費ならびに 賛助金納入のお願い

2005年度から実施した賛助金が毎年会費を上回って辛うじて年間の収支バランスを維持しておりますが、新会計期初年度の2011年も会費未納者が多く、相変わらず賛助金に頼る不健全な状況が続いております。会の永続的發展、安定的運営の観点から、1992年4月に導入した終身会員制度を2014年3月をもって廃止すること及び2014年以降の会費と納入方法を見直すことが、一昨年の総会において承認されております。

会費納入については、2011年4月からの3年間は、従来どおり年1,000円とし3年分をまとめて3,000円をお支払いいただくことと、賛助金についても従来どおり会費相当額を目安に終身会員ならびに免除会員の皆さんにもご協力をお願いしております(詳しくは、別冊「会費についてのお知らせ」をご覧ください)。

東京清陵会はお支払いいただいた会費で、お手元にお届けしている「東京清陵会だより」発行などの運営費に充当しているをご理解いただき、会費ならびに賛助金の納入のご協力をお願いします。

## 清陵勉強会が 東京清陵会の事業に

今年4月より「清陵勉強会」が東京清陵会の活動の一つとして位置づけられ、より多くの方に参加いただき充実した魅力ある研鑽の機会にしたいと思っております。

「清陵勉強会」は、1990年、設立発起人の宮坂広作(50回生)、中村平治(50回生)、岩垂弘(57回生)の3氏が「ベルリンの壁が崩壊し、東西冷戦の終結で世界は激震の時代を迎えており、世界の動き、日本の動きについてもっと勉強しなければ」との思いで、第1回勉強会が本郷の東大教育学部の教室を借りて2月20日にスタートしたのが始まり。

講師の多くは、清陵同窓生に依頼して

いたが、テーマによっては同窓生以外の講師も招聘した。何れの講師も謝礼や交通費はノーギャラで、終了後の懇親会に招待するというだけでもかかわらず、質の高い講義と質疑に3時間近く話して下さった。出席者からは連絡通信費として100円を頂くだけだった。当初から100回目までの事務局は、寺島亮三(58回生)と矢崎悦郎(59回生)の両氏が担当した。

勉強会メンバーは、当初広く門戸を開放していたので、清陵卒業生以外に二葉高校の卒業生や清陵・二葉に関係のない参加者もあり、毎回20人から30人、近年は勉強会メンバーがほぼ清陵同窓生と重なってきており、40人から60人が出席している。2か月に一度、偶数月の最終火曜日の夕方に開く年6回の勉強会の会場は、当初の東大の教室から都心により近いJR水道橋駅近くの三省堂本社会議室に。同社の役員(後に社長)であった五味敏雄氏(57回生)の好意で100回近くまで無償提供頂けたのが、この会が長続きした大きな要因でもあった。

2006年の101回目から、事務局は新たに米山勉男(63回生)、飯島由美子(70回生)、有賀一温(75回生)、関屋孝行(76回生)の4氏が担当し、会場は水道橋駅近くの貸し会議室で、また今年4月からは剛堂会館に移して、この8月の勉強会で135回を数える。

今までに取り上げたテーマは、国際関係、外国事情、国内政治、経済、金融、農業、エネルギー、環境、司法、人権、教育、医療、健康、宇宙開発、IT、コンピューター、文学、出版、映画、テレビ、放送、宗教、考古学、郷土史、オリンピックなど多岐にわたる。テーマによっては、諏訪から駆けつけてくる会員もいる。

#### 勉強会の概要

●開催日/2か月に一度偶数月の第4火曜日(12月は別に定める)18:00~20:00 終了後、講師を囲むでの懇親会(懇親会費用は実費を割り勘)

●会場/剛堂会館ビル(明治薬科大学)1階 会議室 千代田区紀尾井町3-27 有楽町線麴町駅出口①から徒歩4分

●会費/500円

出席を希望される方は、下記にお問い合わせ

※校舎組み立て模型の問い合わせ先:03-3812-5887

わせ下さい。

#### 事務局

米山勉男(63回生) Fax 043-287-2422

Mail mk-yone3545@angel.ocn.ne.jp

## ホームページをリニューアル

2012年6月29日リニューアル版を試行提供しました。林尚孝東京清陵会元会長が2004年12月に開設以来、この6月末までに12,500件のアクセスのあった「東京清陵会」をリニューアルしたものです。

URLは、

<http://www9.ocn.ne.jp/~tseiryu1/>

まだリニューアル作業中であり、不十分な点が多々ありますが、今後は、以下を充実させて参ります。

東京清陵会の行事(総会、清陵勉強会、清陵ゴルフ会など)の紹介、会員の皆さんや学年会の行事などの紹介、東京同窓連ならびに南信同窓連の行事の紹介、清陵関係情報のリンクも多くなる。

皆さんからのご意見につきましても逐次反映して参ります。

## 「東京清陵会」事務局移転しました

2004年度より事務局を引き受けていただいておりました神田シティホテル(65回生金子充宏さん)から、2012年1月1日より小林公認会計士事務所(62回生小林國利さん)内に移転しました。

神田シティホテルでは、東京清陵会事務局会議、当番幹事の定例会議や会報編集会議など諸々の会議開催に便宜を図っていただきました。会発展のための力強いご支援ご協力に感謝申し上げます。有難うございました。

新たな事務局小林公認会計士事務所内では、早速、事務局会議、今年の当番幹事79回生の定例会議や編集会議の開催などに小林さんの力強いご支援ご協力を頂いております。これからもよろしくお願ひいたします。

事務局/〒113-0033 東京都文京区本郷1-10-14 加奈利屋館7階

小林公認会計士事務所気付

東京清陵会事務局

Tel & Fax 03-3812-5887

## 訃報

謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます(敬称略)。

氏名	年次	逝去年月日
遠山 益人	(35回)	2010.1.7
林 辰治	(35回)	2011.6.24
原 孝	(36回)	2010.7.24
山田 直勝	(36回)	2010.6.23
小城 安正	(37回)	2011.6.23
横内 久雄	(37回)	2009.6.14
小松 雅雄	(38回)	2010.10.16
藤森 鐵雄	(38回)	2011.11.7
武川 忠一	(38回)	2012.4.1
伊藤 豊次	(40回)	2011.7.8
久保 尚彦	(40回)	2008
土橋 久男	(40回)	2011.7.25
小池 正衛	(41回)	2012.2.19
中沢 正喜	(41回)	2009.6.30
伊東 清博	(42回)	2011.8.10
小口 信	(42回)	2011.3.30
中村 芳郎	(42回)	2011.1.22
赤羽 祐治	(43回)	2010.11.5
小松 曼耆	(43回)	2010.12.24
新村 浩久	(45回)	2011.1.14
北原 正信	(46回)	2011.10.9
三澤 三平	(46回)	2011.9.16
山田 稔	(46回)	2012.3.4
池内 真明	(47回)	2005.4.14
藤森 篤	(47回)	2011.9.7
宮坂 修吉	(47回)	2011.6.5
岩波 佑次	(48回)	2012.3.11
関 文武	(48回)	2010.7.2
林 忠男	(49回)	2010.7.31
広瀬 正次	(49回)	2010.10.18
福島 脩一	(49回)	2011.9.24
米倉 雄二郎	(49回)	2011.9.5
伊藤 數義	(50回)	2011.3.17
五味 正博	(50回)	2011.1.11
稲垣 政之輔	(51回)	2010.12.13
戸沢 充則	(51回)	2012.4.9
波多 秀夫	(52回)	2011.10.4
原田 睦明	(52回)	2011.8.26
篠遠 允彦	(56回)	2011.6.9
五味 宗穂	(57回)	2011.3.31
鮎澤 昶	(58回)	2012.5.18
栗林 孝嘉	(58回)	2010.7.21
中込 英雄	(58回)	2010.10.4
荻原 国宏	(60回)	2011.2.16
薩摩林 正	(61回)	2011.10.14
白鳥 健二	(61回)	2010.9.2
矢崎 幸生	(61回)	2011.4.21
長門 肇	(62回)	2011.6.14
田中 祐昌	(63回)	2011.3.1
小口 英樹	(64回)	2012.6.21
小口 登良	(64回)	2010.2.19
三村 簡吾	(64回)	2012.7.26
小飼 一至	(67回)	2012.3.27
高木 昭	(73回)	2011.3.19

●事務局に連絡が入った方

別表1 年次別会員数と会費納入結果(2012年7月31日現在)

回生	現員	不明	計	会費
~31	4	13	17	0
32	3	3	6	0
33	2	3	5	0
34	4	1	5	0
35	7	2	9	1
36	2	5	7	0
37	8	3	11	2
38	7	3	10	0
39	14	3	17	1
40	12	3	15	3
41	26	4	30	4
42	21	2	23	5
43	30	3	33	4
44	30	7	37	6
45	32	3	35	8
46	37	8	45	4
47	44	5	49	8
48	49	10	59	18
49	69	6	75	25
50	71	9	80	23
51	90	15	105	43

回生	現員	不明	計	会費
52	95	6	101	52
55	26	1	27	11
56	103	6	109	47
57	107	11	118	66
58	93	10	103	46
59	95	9	104	48
60	100	15	115	70
61	85	13	98	52
62	104	7	111	54
63	99	13	112	71
64	83	13	96	57
65	80	12	92	44
66	80	17	97	39
67	95	17	112	43
68	79	21	100	40
69	108	13	121	51
70	92	21	113	37
71	82	20	102	25
72	58	12	70	22
73	81	11	92	27
74	75	21	96	27

回生	現員	不明	計	会費
75	57	18	75	16
76	63	16	79	19
77	66	15	81	24
78	71	28	99	13
79	55	22	77	21
80	51	17	68	12
81	49	18	67	8
82	49	23	72	8
83	74	29	103	24
84	48	27	75	8
85	53	38	91	12
86	42	37	79	5
87	41	23	64	2
88	29	46	75	7
89	44	46	90	6
90	42	26	68	3
91	27	35	62	0
92	26	42	68	4
93	20	28	48	1
94	25	17	42	0
95	19	23	42	0

回生	現員	不明	計	会費
96	22	31	53	1
97	16	19	35	0
98	14	23	37	1
99	5	11	16	0
100	8	16	24	0
101	4	9	13	0
102	2	3	5	0
103	3	3	6	0
104	1	0	1	0
105	0	0	0	0
106	3	4	7	0
107	1	0	1	0
108	3	9	12	0
109	0	7	7	0
110	4	0	4	0
111	1	0	1	0
112	0	0	0	0
113	0	0	0	0
114	0	0	0	0
115	2	0	2	0
合計	3,422	1,089	4,511	1,279

- 注 1) 現員:東京清陵会に登録されている会員で、所在不明者を除く。  
 2) 不明:以前東京清陵会に所属して現在所在不明のもの。  
 3) 会費:今会計期(2011.4~2014.3)会費完納者および前納者の人数。  
 会費免除会員(2011年度時点で75歳以上、58回生以前)の人数1,131名  
 (内終身会員338名)  
 4) 会費納入者数1,279名と今期納入者数の差は終身会費納入者、  
 その他による。  
 5) 終身会費納入者数1,230名  
 (内 死去:143名、所在不明:73名、退会他:33名)

別表2 年度別会費等納入額および納入者数

前々々々期納入額総計 (1997.4~2002.3)	7,499,200円	1,371名
前々々々期納入額総計 (2002.4~2005.3)	1,667,400円	541名
前々々期納入額総計 (2005.4~2008.3)	6,436,785円	1,167名
前期納入額総計 (2008.4~2011.3)	4,406,000円	812名
内 訳		
2008年4月~ 小計	1,960,000円	(456名)
2009年4月~ 小計	1,334,000円	(364名)
2010年4月~ 小計	1,112,000円	(290名)
今期納入額総計 (2011.4~2014.3)	1,590,630円	407名
内 訳		
2011年4月~ 小計	1,578,630円	(403名)
2012年4月~ 小計	12,000円	(4名)

注)前々期、前期および今期納入額には、賛助金も会費として処理されている。

別表3 会員数と次期繰越金の推移

年	会員数(名)	不明者数(名)	次期繰越金(円)
1996	4,179	267	15,962,791
1997	4,068	329	15,008,425
1998	3,944	437	16,330,130
1999	3,797	546	15,191,116
2000	3,832	485	13,660,668
2001	3,628	649	11,499,913
2002	3,768	672	10,266,836
2003	3,630	767	8,951,881
2004	3,528	794	7,281,132
2005	3,410	894	6,192,586
2006	3,300	928	8,217,342
2007	4,000	698	8,385,652
2008	3,849	818	8,627,401
2009	3,822	813	9,108,456
2010	3,628	968	9,075,532
2011	3,595	960	8,543,349
2012	3,422	1,089	8,677,237

- 注 1) 次期繰越金は各年の3月現在  
 2) 会員数、不明者数は各年の7月現在(2004年は5月現在)

収支計算書(案) 自2011年4月1日~至2012年3月31日 (単位:円)

収入の部

科目	予算額	決算額	差異 (予算の方が)
1 会費	2,660,000	2,848,630	412,000
(1) 会員年会費(161名)	300,000	458,000	207,000
(2) 総会費(155+15名)	1,360,000	1,270,000	124,000
(3) 賛助金会費(242名)	1,000,000	1,120,630	81,000
2 諸収入	113,000	109,347	3,653
(1) 寄付金	50,000	50,000	0
(2) 預金利子	3,000	1,347	1,653
(3) 会議費負担金	60,000	52,000	8,000
(4) 人名録収入		6,000	△ 6,000
当期収入合計 (A)	2,773,000	2,957,977	△ 184,977
前期繰越	8,543,349	8,543,349	0
収入合計 (B)	11,316,349	11,501,326	△ 184,977

支出の部

科目	予算額	決算額	差異
1 経費			
(1) 総会費用	1,160,000	1,081,223	78,777
(2) 会議費	160,000	176,690	△ 16,690
(3) 諸会費	35,000	89,000	△ 54,000
(4) 印刷・通信費	700,000	718,886	△ 18,886
(5) 事務雑費	20,000	21,050	△ 1,050
(6) 会報費	750,000	737,240	12,760
2 予備費	20,000	0	20,000
当期支出合計 (C)	2,845,000	2,824,089	20,911
当期収支差額 (A)-(C)	△ 72,000	133,888	△ 205,888
次期繰越 (B)-(C)	8,471,349	8,677,237	△ 205,888

寄付金:本部 40,000 学校:10,000

2012年度収支予算(案) 自2012年4月1日~至2013年3月31日(単位:円)

支出の部

科目	金額
総会費用	1,160,000
会議費	180,000
諸会費	150,000
印刷・通信費	820,000
事務雑費	25,000
会報費	830,000
予備費	20,000
小計	3,185,000
次期繰越	8,606,837
合計	11,791,837

収入の部

科目	金額
総会費	1,360,000
会員年会費	500,000
賛助金会費	1,150,000
会議費負担金	53,000
寄付金	50,000
受取利息	1,600
小計	3,114,600
前期繰越	8,677,237
合計	11,791,837

(注) 2012年度予算収支差額は70,400円の不足となります。

## 東京清陵会 2011 年度会務報告

### 2011

- 4・2 当番学年(78回生)第2回進行会議/編集会議(神田シティホテル)
- 4・8 南信同窓連理事会(新宿中村屋レガル)
- 4・16 南信同窓連第43回親睦ゴルフ(紫カントリークラブ)
- 4・23 第1回事務局会議(神田シティホテル)
- 4・30 当番学年(78回生)第3回進行会議/編集会議(神田シティホテル)
- 5・19 東京同窓連常任理事会・理事会(アルカディア市ヶ谷)
- 5・21 南信同窓連平成23年度総会(ホテルメトロポリタンエドモント)
- 5・28 本部常任幹事会、幹事会(清陵会館)
- 6・25 本部 総会(ホテル紅や)
- 7・2 東京同窓連総会(アルカディア市ヶ谷)
- 7・2 当番学年(78回生)第4回進行会議/編集会議(神田シティホテル)
- 7・16 寒水会「現代教育観」を読む会(第6回)
- 7・29 常任幹事会(南青山会館)、出席者22名
- 7・30 当番学年(78回生)第5回進行会議/編集会議(神田シティホテル)
- 8・25 幹事会(南青山会館)、出席者34名
- 8・27 寒水会「現代教育観」を読む会(第7回)
- 9・15 会報「東京清陵会だより」22号発行、送付3,600部
- 9・15 活性化ワーキング第1回例会(扇寿司)
- 10・8 寒水会「現代教育観」を読む会(第8回)
- 10・14 第45回定期総会及び懇親会(アルカディア市ヶ谷)、総出席者172名
- 10・18 東京清陵会ゴルフコンペ(取手桜ヶ丘ゴルフクラブ)
- 10・29 本部物故会員ならびに道志社先輩慰霊法要(地蔵寺)
- 10・30・31 南信同窓連第24回親睦旅行(月岡温泉)
- 11・09 南信同窓連第44回親睦ゴルフ(紫カントリークラブ)
- 11・15 事務局移転に関する打合せ(小林公認会計士事務所)
- 11・18 寒水会「現代教育観」を読む会(第9回)
- 11・19 第2回事務局会議(神田シティホテル)
- 12・1 南信同窓連忘年会(ホテルメトロ

- ポリタンエドモント)
- 12・6 活性化ワーキング第2回例会(扇寿司)
- 12・8 東京同窓連常任理事会・幹事会(アルカディア市ヶ谷)
- 12・8 事務局移転に伴う郵便新バーコードの取得(本郷郵便局)
- 12・9 寒水会「現代教育観」を読む会(第10回)
- 12・17 当番学年(79回生)第1回進行会議/編集会議(神田シティホテル)

### 2012

- 1・20 寒水会「現代教育観」を読む会(第11回)
- 1・21 当番学年(79回生)第2回進行会

## 東京清陵会 2012 年度事業計画

### 2012

- 4・12 第1回事務局会議(小林公認会計士事務所)
- 4・24 第133回清陵勉強会(剛堂会館)・講師 山崎俊一(80)
- 4・25 83回生学年懇親会
- 4・28 当番学年(79回生)第5回進行会議/編集会議(小林会計士事務所)
- 5・10 若手会員との意見交換会(南青山会館)
- 5・19 当番学年(79回生)第6回進行会議/編集会議(小林会計士事務所)
- 5・19 南信同窓連定時総会(ホテルメトロポリタンエドモント)
- 6・2 清陵本部同窓会幹事会
- 6・3 新田次郎生誕100年記念講演会(諏訪市民センター)
- 6・16 当番学年(79回生)第7回進行会議/編集会議(小林会計士事務所)
- 6・26 第134回清陵勉強会(剛堂会館)・講師 小林和男(62)
- 6・30 清陵本部同窓会総会・懇親会(ホテル紅や)
- 7・3 会報臨時編集会議(神田シティホテル)
- 7・7 東京同窓連総会・懇親会(アルカディア市ヶ谷)
- 7・18 会報臨時編集会議(第2回)(神田シティホテル)
- 7・26 常任幹事会(南青山会館)、出席者20名
- 7・28 当番学年(79回生)第8回進行会議/編集会議(小林会計士事務所)
- 8・28 第135回清陵勉強会(剛堂会館)・

- 議/編集会議(小林会計士事務所)
- 1・31 清陵勉強会幹事と事務局の打合せ(麴町高田屋)
- 2・4 東京同窓連平成24年新年会(アルカディア市ヶ谷)
- 2・18 当番学年(79回生)第3回進行会議/編集会議(小林会計士事務所)
- 2・23 事務局移転に伴う新電話番号への切り替え
- 2・25 清陵同窓会本部役員会(清陵会館)
- 3・1 寒水会「現代教育観」を読む会(第12回)
- 3・8 活性化ワーキング第3回例会(扇寿司)
- 3・24 当番学年(79回生)第4回進行会議/編集会議(小林会計士事務所)
- 3・14 東京同窓連親睦ゴルフ(越生ゴルフクラブ)

- 講師 小池一平(76)
- 8・30 学年幹事会(南青山会館)
- 9月中旬 会報「東京清陵会だより」23号発行
- 10・12 第46回総会・懇親会(アルカディア市ヶ谷)
- 10・16 東京清陵会ゴルフコンペ(オーク・ヒルズカントリークラブ)
- 11・15 第2回事務局会議(小林公認会計士事務所)

その他 寒水会  
清陵勉強会(8月、10月、12月 原則偶数月第4火曜日)

### 紙面横組に変更のお知らせ

皆さん新しい紙面の第23号をご覧になって如何でしたでしょうか。これまでの縦組の会報になじみの方も多いと思いますが、今年の当番幹事79回生より、編集にあたり充実した内容をより見やすい形の紙面にするため、横組に紙面を一新したい、との提案がありました。事務局との複数回の編集会議と常任幹事会での論議を経て、変更することにしました。会員の皆さんの忌憚のないご意見をお寄せください。この紙面刷新が東京清陵会活性化の一助になることを祈念しております。 会長 藤森宏一

### 「東京清陵会」ゴルフ同好会

## 第19回ゴルフコンペのご案内

会員の交流・親睦を兼ねてゴルフコンペを下記の要項で開催します。同期生などお誘い合わせのうえ、奮ってご参加ください。

- 日時:10月16日(火) 8時集合 9時スタート
- 場所:オーク・ヒルズカントリークラブ(東関東自動車道・大栄ICより7km、約15分)
- プレー代:13,900円(昼食付・キャディ付) 会費:5,000円
- 参加希望の方は、☎03-3518-2385 スタジオバラム=清水(84回)まで。FAXの場合は、住所・氏名・卒業回・連絡先を明記の上、お申し込みください(FAX:03-3518-2386)。
- 幹事=藤森宏一(63回)、小海健治(84回)

昨年10月18日に取手桜ヶ丘ゴルフクラブで行われた第18回ゴルフコンペ。17名が参加、優勝は河合信也さん(63回)。

